



中山間地域発 「新たな学び」 Sign Post Book

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び



長野県教育委員会学びの改革支援課

中山間地域 新たな学び 創造事業

平成30年4月～



新たな学びのその先へ

異学年合同の学びへ

- 学び合い、考えを深める授業の推進
- プロジェクト型の学習形態の推進
- 教職員が連携するカリキュラムの開発

自律した個の学びへ

- 自律した学習を促す学習環境づくり
- 「学びたい」を実現する授業の模索

遠隔合同の学びへ

- Zoomを用いた授業での連携
- ICT活用に特化した授業を実践

ねらいと構成

長野県でも児童生徒数が減り続けている現実があります。これは中山間地域だけのことではありません。今後、少ない人数での有効な学習スタイルが求められるようになると考えられます。

県内の中山間地域にある学校では、規模が小さいことによる「少人数」や「限られた教職員」を強みに変え、「子どもたちの視点を大切にした学習」や「教職員全員で考え、全員で実践する取組」が行われています。

長野県教育委員会学びの改革支援課が現場の先生方・有識者と取り組んだ「中山間地域の新たな学びの創造事業」では、中山間地域の小規模校からリーディング校を指定し、コーディネートを教員を配置しました。コーディネーター教員は、中山間地域の特徴を踏まえて、少人数のよさを生かし、子どもたちと共に新たな学びを開発しました。

実践を持ち寄る「開発チーム会議」では、「ツール」より「マインド」を優先し、「学習者のための学び」について議論してきました。

「異学年合同の学び」「自律した個の学び」「遠隔合同の学び」という視点で、開発したカリキュラムと実践が整理されています。有識者の皆さんのページや全国へき地教育研究大会長野大会の実践、中学校の実践も含めてご覧いただければと思います。

この冊子のタイトル（Sign Post＝道しるべ）のように、「新たな学び」の参考にして頂ければ幸いです。

学びの改革支援課長	佐倉 俊
義務教育課学校支援幹	中村 康則

1st

- ☐ 幸せな子ども時代と新たな学び P 1-1～
(学校法人軽井沢風越学園
理事長 本城慎之介氏)
- ☐ 学習環境を子どもとつくること P 1-7～
から学校が変わる
(学校法人軽井沢風越学園
校長・園長 岩瀬直樹氏)

2nd

- ☐ リーディング校の取組
(1) 飯田市立上村小学校 事例①②+
(2) 木曽町立三岳小学校 事例③④+
(3) 栄村立栄小学校 事例⑤⑥⑦+

年間
計画

3rd

- ☐ 自律的に学ぶことを楽しみ, P 3-1～
未知の世界と出会う
(信州大学学術研究院教育学系
教授 伏木久始氏)
- ☐ できないことをできるに, P3-8～
マイナスをプラスに
(信州大学学術研究院教育学系
教授 村松浩幸氏)

4th

- ☐ 全国へき地教育研究大会
長野大会
・10校の実践報告より
事例①～⑫

資料

- ☐ 中学校
 - ・合同教科会
 - ・テスト学習プリント
 - ・ICT遠隔合同授業
 - ・テスト共有ネットワーク 資料：事例①～④

1st

- 幸せな子ども時代と新たな学び
(学校法人軽井沢風越学園 P 1-1～
理事長 本城慎之介氏)
- 学習環境を子どもとつくること
から学校が変わる P 1-7～
(学校法人軽井沢風越学園
校長・園長 岩瀬直樹氏)





幸せな子ども時代と新たな学び

本城 慎之介
学校法人軽井沢風越学園 理事長

■ 幸せになってほしい

日々たくさん子どもたちと、そしてかつて子どもだった人たちと関わりながら生きている。子どもたちと元・子どもたちの様々な表情や感情に出会いながら、私が願うことはシンプルだ。幸せになってほしい。そして共に生きる人の幸せも願ってほしい。このシンプルな願いが学校づくりに取り組む私のベースとなっている。「学校づくり」と書いたが、「幸せな子ども時代をつくるには…?」という問いに取り組んでいるという表現の方が適切だ。ただ、「はい、これが幸せな子ども時代だよ。」と、その方法や環境を子どもたちに差し出すつもりはない。そのづくり手は、大人だけではない。子ども自身も幸せな子ども時代のづくり手だ。私たち大人は、づくり手であろうとする子どもの邪魔をしてはいけない。

平成30年度からの2年間の「中山間地域新たな学び創造事業」でも、自分たちの学びを自分たちでつくろうとする信州の子どもたちの姿があった。私たちは、その姿から多くの刺激を受け、新たな学びをさらに創造していく思いを強くした。そしてその思いは、私自身がこの10年ほどの間に、信州の自然の中で出会った子どもたちの姿から受けたそれと重なる。

私が出会った子どもたちの姿のいくつかを紹介しながら、幸せな子ども時代と新たな学びについて、思いを巡らしてみたい。



■ 焦げた手袋事件

北海道の雄大な自然の中で生まれ育った私が、東京での我が子の子育てに疑問を持つのは当然の流れだった。豊かな自然があり、東京への移動にも便利なところが気に入り、軽井沢町への移住を検討し始めたのは2005年頃のことだ。同時に、世界で活躍するようなエリートを育てるために全寮制中高一貫校を設立するという計画も進めていた。自分の子育てのためにも、そして全寮制中高一貫校を設立するためにも、軽井沢町という場所は最適だろうと思っていた。

引っ越し前に、我が子たちが通う幼稚園や保育園をいくつか見学した。“焦げた手袋事件”と呼んでいる衝撃的な出来事は、その見学先のひとつである「森のようちえん」で起こった。「森のようちえん」は、野外での生活を中心とした幼児教育のひとつで全国に広がっている。長野県でも、2015年から「信州型自然保育認定制度」がスタートし普及に取り組んでいる。



「軽井沢町内にあるキャンプ場と周辺の森を拠点にし、晴天時はもちろん、雨でも雪でも基本的には野外で活動する。最近耳にすることも多くなった“森のようちえん”や“野外保育”と呼ばれているスタイル」というような事前情報を頭に入れながらその「森のようちえん」を訪れたのは、2009年1月。一面雪景色、氷点下15℃前後の気温。「今日はさすがに屋内中心で過ごすのだろうな」と思っていたのだが、しっかりと防寒具を身にまとった子どもたちはずっと外遊びを続け、おむつ替え以外は屋内に入らなかった。倒木をロケットに見立ててのごっこ遊び。雪の中に腰をおろしてのおままごと。厳寒の軽井沢の森の中で豊かに遊ぶ子どもたちの姿。その光景に感心しながら、我が子にもこういう経験をしてもらいたいと思いながらゆったりとした気分で見学していた。

それはランチタイムに起こった。厳寒の中でもランチは野外。焚き火を囲んで焼きおにぎりや手にもって食べられるおかずを立ったまま食べていた。少し遅れて2歳児のミチヒサくんが、雪で濡れた手袋を外し、それを乾かそうと焚き火の周りにある石の上に置いた。どう見ても手袋の火が移りそうな位置関係。その場にいたスタッフもミチヒサくんの行動に気が付いているのだが、誰も何も声をかけない。スタッフが何もしないことを怪訝に思っていると、案の定、手袋は焦げてしまいミチヒサくんは泣き出してしまった。「やっぱり焦げちゃいましたね。」とスタッフに声をかけると、「そうですね。でもね、ミチヒサくん、先週は燃やしちゃったんですよ。」とだけ答え、彼を抱きかかえた。

その瞬間、頭をガツンと叩かれたような衝撃を受けた。2回とも失敗だ、手袋はダメになっている。でも、前回の失敗の経験から、火との距離感がつかめてきて、燃やすから焦がすに変わったミチヒサくん。きっと次は焦がさずに乾かせるだろう。そして今回は手袋が燃えるまで見守り、今日は焦げるまで見守ったスタッフ。安心して何度も失敗できる環境、関わりがここにはしっかり存在している。こうやってたくさん挑戦でき、たくさん失敗できる安心感がある場では、子どもたちが主体的に学ぶことができる。失敗がたつぷりと許容される場では、「わたしはわたしでいい。わたしはここにいていいんだ。」という自尊感情が豊かに育まれ、他の人の自尊感情も認め合う関係性を深めることができるにちがいない。ここはなんて豊かな場なのだろう。そんな思いを強くしたと同時に、“エリートを育てるための全寮制中高一貫校設立”のベースにある私自身の教育観が大きく揺らいだ。

それまでの私の教育観は、リンゴの栽培に例えるならば、同じような形、同じような色、同じような甘さのリンゴを6年間でたくさん育てる、そういうものだった。目に見える地面から上の部分だけに関心が偏っていた。この“焦げた手袋事件”で、目に見えない地面の下の方の根の部分の大切さに気がついた。どんなに強い風が吹いても大雨が降っても倒れないように、しっかりと地中に根を広く深くはる。何度も挑戦し、何度も失敗したとしても揺るぎない自分自身を持つこと。そしてそれが許容され受容される安心した場と関係づくり。それが、1人1人の子どもの幸せにつながると確信した。

台風の時に倒木することが多いと思われるカラマツであるが、これは植林時の“根切り”という作業が影響しているようだ。台風で倒木したカラマツを調査したところ、地面に対して水平方向に伸びる側根は

あったが、垂直に伸びる直根が見当たらなかったようだ。(参考 2018年10月25日 信濃毎日新聞)。植林されるカラマツは、作業効率を上げるために直根を“根切り”される。そのため重心が高く、強風で倒れて(根返りして)しまったのではないかという見立てである。

私は、幼児期・学童期はまずは直根を自分自身にしっかりと深く根ざすような体験の積み重ねが大切だと考えている。安易に側根を伸ばさなくていい。深く太く伸びた直根からは、やがてしっかりと広く側根が伸びていく。幸せな子ども時代と新たな学びは、そこから始まっていくのではないだろうか。



■「うまく転べるようになりますように。」

そんな事件から数か月後。私はその「森のようちえん」のスタッフとなり、森の中で子どもたちと日々過ごし、保育の実践を積み重ねていった。刻一刻と変化する森で、たくさんの生命と仲間と出会い、子どもたちはじっくり、ゆったり、たっぷり遊び、そして学んでいた。そうしながら、1人ひとりがそれぞれのペースで少しずつ大きくなっていく。そんな毎日だった。

その「森のようちえん」では、誕生日のお祝いに「つमりのプレゼント」を贈り物にしていた。どこにも売ってない、その子にぴったりのものを想像して、誕生日のその子に一人ひとりから手渡す。手渡す子どもの手にも、受け取る子どもの手にも、何もない。けれども、そっと手渡したり、重そうに受け取ったりする。目には見えないけれども、その小さな手の中には、たしかに何かが鮮明に創造されているのだった。

その日、6歳の誕生日だったのは忍者ごっこが好きなルカくん。「月まで届く星の手裏剣です。月まで届くと願いごとが叶います。」とリョちゃんはルカくんに贈り物を手渡した。うれしそうに受け取ったルカくんに「どんな願い事をする？」と質問してみた。すると、ルカくんはちょっと照れながら言った。「うまく転べるようになりますように。」そう、ルカくんはよく転んでいた。派手に転ぶ。痛くて泣く。手に持っていた大切なものが壊れて泣く。悔しくて泣く。それにも関わらず、そんな彼の願いは、「転ばなくなりますように」ではなかったのだ。

転ぶということを避けない。でも、大きな怪我にならないようにうまく転べるようにになりたい。これは学びに向かう大切な姿勢だ。

「転びませんように。」そんなふうに願うのは大人の側だ。子どもとの関わりの中で、ついつい先回りをしてしまふことがある。失敗しないように、スムーズに進むように、そういった大人としての思いが行動として全面に現れる。転ばないことを目標にする。転ばない方法を指導する。転ばないようなところを走るよう伝える。転ばない環境を整える。転びそうになったら抱きかかえる。そういった大人の姿勢からは新しい学びは生まれない。これからの時代は、子どもに学びの主導権をしっかりと手渡す必要がある。そうすることで、子どもたちは、自ら主体的に意欲的に学び、幸せな子ども時代を自分の手でつくっていくのだ。

■ 過不足なく関わる

「森のようちえん」では、切り株が大活躍する。椅子や机になり、何かの目印にもなり、遊び道具にもなる。ある時、体験入園に来た3歳の男の子が、切り株に乗ろうとしていた。普段は切り株に乗るような体験をしていない様子だった。日常ではあまり目にするのしない切り株がゴロゴロあるのを見て、乗りたくなったのだろう。たくさんある切り株の中から、ひとつを選び登ろうとし始めた。

彼が登ろうとした切り株は、彼の膝よりも高い切り株だった。大人でも自分の膝よりも高いところに足をかけるのは難しい。しかも切り株だから、ぐらぐらと不安定だ。その子どもどうやら難しそうだということはなんとなく感じ始めているようだった。それでも、なんとかしようとしていた。何度も片方の足をかけてはやめ、また足をかける。その様子を少し離れた所で見ながら、片足がかけられたとしても、もう片方の足を地面から離れた瞬間に、きっと切り株はグラッと倒れて、彼は転び泣いてしまうだろうなと思っていた。でも、周囲の状況からすると、大きな怪我にはならなさそう。私はそう判断し、そのまま彼の様子を離れたところから見続けていた。

何度も挑戦した後、彼はその切り株に登るのに区切りをつけた。そして、すぐそばにあった 半分くらいの高さの安定した切り株を見つけて、その上にすっと登った。「登れたぞ!」という満足そうな表情で切り株の上に静かに立っていた。どんな景色が見えたのだろうか。1人で登れたからこそその景色が見えているはずだ。

自分で切り株を選び、挑戦する。諦めることを自分で決め、次の挑戦の場を選ぶ。そして、1人で満足する。こういう子どもの姿に出会った時、“過不足なく関わる”ということの難しさ大切さを感じる。切り株に登ろうとしている彼への大人としての私の関わり方は様々な選択肢があった。「危ないよ。もう少し大きくなってからね。」と声をかけて制止する。「転んじゃいそうだから、こっちの切り株の方がいいんじゃない?」と提案する。手をつないだり、抱っこしたりして、その切り株に登らせてあげる。半分の高さの切り株に登れた時に「登れたねー、すごいねー」と駆け寄って声をかける。これらの関わりは、どれも私には“関わり過ぎ”のように感じ、私はただ少し離れた所で静かにその様子を見守っていた。しかし、もし彼がそれによって怪我をしたならば、私の関わりは“足りてない”ということになるだろう。

学んでいる子ども、学ぼうとしている子どもへの関わりは難しい。“過不足なく関わる”ということがキーワードになるということは理解しているつもりだ。しかし、実際にそれを実践しようとなるととても難しい。一人一人の子どもを日々よく観察することが基本となる。そして一緒の場にいる他の大人同士が意識を共有し、その子への関わりについて、ふりかえったり確認し合ったりすること、それを保護者の方とも分かち合うことも必要だろう。

過不足なく関わるということが、どういうことなのか。どうすれば実現できるのか。私は、まだ自信を持ってその答えを提示できる状況ではない。新しい学びを実現するためには、大人も学び続けていくことが大切なのだ。



■挑戦し続ける

私は、仲間と共に、そしてたくさんの方に支えてもらいながら、2020年4月に軽井沢風越学園を開校する。地域に根差し、社会に開かれた幼小中混在校。そこでは、3歳から15歳の子どもがじっくり、ゆったり、たっぷり、まぎって遊び学ぶ。

幸せな子ども時代をつくるための新たな学びは、どのように実現できるのか？ その学びは、どのように広げていくことができるのか？ そのような問いを立てながら、日々試行錯誤し、実践を積み重ねていく。私たちが学んだことは、長野県をはじめ全国に積極的に発信していきたい。同時に私たちもたくさんの現場に足を運び、実践者と出会い、切磋琢磨を繰り返していきたい。

「新たな学び」を実現するための挑戦は、まだスタートしたばかりだ。長野県の中山間地域で取り組まれた数々の挑戦が、今後さらに深化・進化し、広がっていくことだろう。それと同時に、一人ひとりの子どもたちが幸せに子ども時代を過ごせるようになることを願っている。この挑戦はまだまだ続く…。



本城 慎之介（ほんじょう しんのすけ）

1972年、北海道生まれ。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。大学院在学中の1997年に三木谷浩史氏と共に楽天株式会社を創業し、取締役副社長を務める。2002年に退任後、株式会社音別を設立し、「教育」をテーマに活動を始める。横浜市立東山田中学校長や学校法人東京女学館理事を歴任するなど、現場と経営の両方に軸足を置き活動した。2009年より軽井沢町で野外保育の運営と保育に携わる。2016年12月に一般財団法人軽井沢風越学園設立準備財団を設立し理事長就任。2019年10月に学校法人軽井沢風越学園設立、理事長就任。2018年10月から軽井沢町教育委員も務めている。2009年より軽井沢町在住。





2018年サマースクール「本物の写真家になろう」での小学校2年生の作品

学習環境を子どもと つくることから学校が変わる

岩瀬 直樹
学校法人軽井沢風越学園 校長・園長

■わたしたちの未来をわたしたちでつくる冒険

学校教育が希望を持って語られなくなっている。ブラックな職場、ブラック校則、いじめ、教員を目指す人の減少、等々。学校は本来、人が成長していく、どんな子どもも幸せな子ども時代を過ごす場、自分(たち)の成長を実感する場。そんな場が楽しくないわけがない。世の中で一番希望を持って語られるべき場であるはずだ。

私たちは公立学校の可能性を信じている。しかし、同時に公立学校は変わっていく必要があるとも考えている。これからの社会を創っていく子どもたちにとって、教室での経験は「20年後の社会」のありようにつながっている。主体的に学校や自身の学びをつくる経験は、主体的に社会に参画しようというマインドを育て、「言われた通りにする」経験を積み重ねれば、受動的で消費的なマインドを育てるだろう。

自分の人生をデザインしつくっていく主体性・創造力は前者でしか育たない。

では、誰がそんな学校をつくるのか。教員だけが頑張ってもそんな学校はできない。4月開校予定の軽井沢風越学園では、「子どもも大人も、つくり手である」と考えている。

軽井沢風越学園は、子どもも大人も「つくる」経験を、じっくり、ゆったり、たっぷり、まざって積み重ねていきます。

本気で手間をかけて「つくる」ことに没頭し、ときには不安や不安定さを味わいながら「つくる」ことに挑戦していきます。

私たちは子どもこそがつくり手であることを信じています。

ここでいう「つくる」は物理的なものや学習の成果物だけにとどまりません。安全・安心な場を自分たちでつくる、学びをつくる、自分たちの学校をつくる、コミュニティをつくる、仕組みをつくる、ルールをつくる、自分をつくる。つまり、「わたし(たち)の未来をわたし(たち)でつくる」冒険をするのです。

子どもたち、スタッフ、保護者、地域の方々など、軽井沢風越学園では誰もががつくり手です。

「つくる」ことを通じて、「自由に生きる」ということと「自由を相互に承認する」ということを繰り返し試していきます。そうすることで、一人ひとりが幸せになり、幸せな社会をつくっていくのです。

これはなにも軽井沢風越学園だけのことではなく、全ての学校に言えることだ。

よりよい学校は自分たちでつくっていくもの。つくっていくためのコントローラーは私たちの手元にある。「よりよい学校とはどのような学校か」を探究し続け、自分たちでつくっていく。そのプロセスで、「自分が行動すれば自分を取り囲む環境は変わるのだ」と実感する。その経験は、ひいては社会に対する効力感につながり、主体的に社会をつくっていく市民を育てていく。

学校が変わっていく鍵はここにある。では具体的な小さな第一歩はどこだろうか。まずは自分たちの学習環境を自分たちでつくる、からスタートしてみたい。

■学習環境をとらえなおす

日本の学校建築の多くは、同じ形の教室が廊下に沿って一直線に並んでいる、いわゆる片廊下型校舎である。そのような教室の形式は「他に対して閉鎖的であり、この中では1人の教師によってクラスメンバー全員が「一斉進歩学習」によって主導されることが学校教育の基調となる」といわれるように、現在の一般的な教室環境が、教師主導の一斉授業を強化してしまっているとも考えられる。

全国的には、70年代からオープンプラン・スクールをはじめとした子どもたちの学びやすさに焦点を当てた学校建築は増えたが、先進的な学習環境も当事者にとって「与えられた環境」になってしまい十分に機能していない所が多いときく。東京学芸大学教職大学院准教授 渡辺貴裕氏は、「その空間に込められた思想を教師たちが活かそうとしなければ、新たな学校建築上の試みは役に立たず、かえって「他と違って不便な施設」と認識される可能性がある。実際、教室の横に配置された、子どもが数名、中に入ってくつろいだりできることを意図された「アルコーブ」と呼ばれる小さな空間が、教師たちに単なる物置として使われ、子どもが寄りつかな

くなっているといった例が、学校建築の「先進校」とされる学校においてさえ見られることもある。設備があっても、教師たちにその空間を活かそうとする構えがなければ、その設備は活かされない。」と指摘しているが、残念ながら、ハードとしての学校建築を変えたからといって、ただちに子どもたちの学びに変化が起きるわけではない。大切なことは、空間の意味と価値を踏まえ実践を変えていこうとする意識や継続的な取組だ。ただ学校建築を一から検討できるチャンスはそうあるものではない。

澤本(1996)が「教室といえばようかん型の校舎に同じ長方形の教室が長廊下の片側に並ぶ現行方式しか思い浮かべられない教師は、その枠の中でしか授業を考えられない。木陰の読書、屋上での合唱や詩の暗唱、廊下に机を出した一人学び、廊下コーナーのパソコンコーナーやミニ美術館等々、頭を切りかえれば、いろいろなアイデアがわいてくる」というように、従来の学校建築の枠の中でも、その空間の活用の仕方次第で、様々な可能性が広がっていくはずだ。

■教室リフォームプロジェクト

見方・考え方を変えれば、実は一般的な教室にも多くの利点がある。自由に移動できる机と椅子、余計な壁や柱がないすっきりした部屋……見方を変えれば、自由度の高いフレキシブルな学習空間と見ることもできる。

私が小学校で担任をしていたころ「教室リフォームプロジェクト」を行ってきた。

学習の当事者である子どもたちが主体的に参画して、「どうすれば居心地のよい空間になるか」「どうすれば学びやすい環境になるか」のアイデアを出し合い、協働で教室環境をつくっていくのである。先に澤本(1996)が指摘していることを学習者と共に試行錯誤する営みだ。

プロジェクトで重要なのは、

- ①教師だけでなく学習者自身が「こうしたい」というアイデアを出すこと、
- ②子どもたちが実際に空間をデザインしてみること、
- ③まずプロトタイプ(試作品)を試し、不都合があれば改善を図ること。

この3点を大切にしながら、継続的に実践を重ねることによって、子どもたちは学びやすさや居心地のよさに敏感になり、「毎日過ごす教室の環境を、自分たちの手でリフォームし続けたい」というオーナーシップ(物事を自分事と捉え、主体的に取り組む姿勢)が育まれていく。

学習環境を教師が準備してあげるのではなく、学びの主体であり教室のオーナーである子どもたちと一緒につくる。

机をアイランド(グループ)に固定することで、協同的な学びをクラスを中心とする。座り方ひとつで学び方が変わっていく。私は30歳の時に、アイランドで固定することで、自身の授業スタイルを変える縛りとなった。

共同を促しやすいので、異学年合同の学び、自律した個の学びに合った環境といえる。



畳を置いて図書コーナーを作る。畳は人が集う場を促す。本を読んだり、少人数で話し合ったり。教室を学習コーナーに分けることで、様々な学び方が同時に起きやすくなる。

キャンプ用の椅子は「クールダウンチェア」。感情が揺れた時はここに座ってクールダウンする。誰が使っても良い。ぬいぐるみを抱きながら座っている人は、みんなで気にしつつそっと見守る、をクラスのマナーにしていた。



子どもたちが自分たちで試行錯誤することが大事である。畳コーナーを窓際に寄せてみたこともあった。これは狭くてあまり活用されず、3週間余りで場所が変わることとなった。手が届くところに本があると、読書をする子は飛躍的に増える。



人が集うベンチを置いたことも。子どもたちと一緒にベンチを作り、朝の会や帰りの会、授業で、全員で集まって話す際のコーナーとして活用した。

集まる場所をつくと人は集まる。畳コーナーも同様だ。



こんな小さな工夫も大切。環境をより良くすることは自分たちの手元にあることを実感できる。

子どもたちの現状に応じて、やりたいこと、やれるところから小さく出発していくことが大切だ。

「やってあげる」から「自分でやってみる」へ。

教師が手を尽くすことで、子どもの主体性を奪っているかもしれないことに自覚的になりたい。



■ エージェンシー

「教室リフォームプロジェクト」において身につけてほしいものは、ハウツーではなく考え方である。現状の空間をどうリデザインするかを、すべての当事者がともに考え試してみる。教室という小さな空間の改善から目覚めたオーナーシップは、やがてその他の環境、ひいては社会への当事者性と、自らの行動による改善可能性への確信へとつながっていくのではないだろうか。

それは、OECDが「OECD education 2030」の中で、これからの教育で重要なのはエージェンシー（社会参画を通じて人々や物事、環境がより良いものとなるように影響を与えるという責任感を持っていく姿勢・態度）だと言っているが、それは手元で子どもと共に学習環境を試行錯誤する、こんな一歩から地続きである。

教室環境をどうしたら子どもたちは使いやすいか、学びやすいかなあと考える時、エンドユーザーである子どもたちに、

「ねえ、どうすると使いやすくなる？」と相談して一緒に教室環境をつくっていく。意見が割れたら、「じゃあ、1週間ずつ試してみて、よかった方でいこう。」と一緒に実践研究する。教室環境を「共同修正」する。

例えば自律した個の学びのために学習予定や学習進度、振り返りを記入するワークシートも、

「試しにこんな形式にしてみたんだけど、使ってみていろいろ意見ください」と問う。

使っている本人ならではの建設的な修正案がたくさんもらえるはずだ。このようにワークシートも「共同修正」すると、圧倒的によくなっていくし、何より子どもたちが消費者から主体的な「つくり手」に変化していく。

一緒につくる。困ったら相談する。これが、学校の先生にとって（いや先生に限らず）、最も重要なあり方だと私たちは考えている。

これを「共同修正」という言葉で定義したい。学校のあらゆることで、子どもたちと共同でよりよくしていく。本気で子供や保護者が参画する場をつくる。「共同修正」を学級の、学校の核に据えたと腹を決める。それが民主主義の第一歩ではないかと思う。そして、それが自由の相互承認の感度を育む第一歩だ。

極端なことを言えば、研究授業においても、子どもたちに授業案を示して、「どう思う？」と相談したっていい。

「導入はもう少し時間とった方がいいんじゃない？ペアでの対話で3分は短い。1人しか話せない。」

「振り返りはノートよりジャーナルの方が書きやすい」

「全体での対話は、10分じゃ足りないよ」

「ホワイトボードに話合いのテーマ書いて出しておけば？」

「途中、見に来ている人に『～って私は思うんですけど、どう思いますか？』って聞いてみよう」

「そもそも、課題が簡単すぎるんじゃない？」

「参観者が見やすいように、教室のレイアウト変えた方が良くかも」

私が担任していた子たちは教員の指導案検討さながらの真剣さで授業案を共同修正した。

共同修正=そのコミュニティのメンバーでよりよくし続けるプロセス

これが教室の文化になっていった頃、こんなことが起きた。ある朝のサークルタイム（朝の会）でのこと。ある議題で話合いが行き詰まり、困った司会（ファシリテーター）の子がいった一言。

「どう進めていいかわからなくなったんだけど、どうしたらいいかな」

謙虚な問いかけの力。共同修正のあり方。この問いかけで話合いは深まっていった。メンバーのほとんどが「当事者」になっていったのだ。人には力がある。

■ 大人も変わり続ける

教職員も同様だ。例えば教職員全員が参画して、居心地がよく、働きやすい職員室を目指してリフォームに挑戦してみると、「与えられた職員室」から「自分たちの職員室」へと、意識が変化するかも知れない。「学習環境（職場環境）づくりに参画する」ことは、公教育を変えていく重要なアプローチの1つだ。

中山間地域の新たな学びプロジェクトでは、2年間にわたって、これまでの学校教育で当たり前になっていたことを問い直し、教職員が「つくり手」となって試行錯誤してきた。自律した個の学びも、異学年合同の学びも、遠隔合同の学びも、「今までの学び方を今まで通り続ける」ではなく、未知の新たな学び方を、教職員と子どもが共につくり手となって試行錯誤してきた。このプロジェクトには正解はないし、終わりもない。学習者と共に共同修正しながら、新たな学びを探究し続けるプロセスそのものなのだと思う。大人が変わり続けることが、新たな学びを生み出すのだろう。

軽井沢風越学園では、関わる全ての人々が「つくり手」となり、よりよい学校を目指し続けます。この学校での試行錯誤が、全ての学校がよりよく変化していくことの触媒となることを目指して地道に共同修正を重ねていきます。

学校が変わっていく方法は身近にたくさんあるはずです。

ともに変化していきましょう。

《引用・参考文献》

- ①上野淳『学校建築ルネサンス』鹿島出版会、2008年。
- ②澤本和子『学びをひらくレトリック』金子書房、1996年。
- ③岩瀬直樹ほか『子どもとつくる教室リフォーム』学陽書房、2017年。
- ④岩瀬直樹・吉田新一郎『シンプルな方法で学校は変わる 自分たちに合ったやり方を見つけて学校に変化を起こそう』みくに出版、2019年（学校改革のヒントを網羅的にまとめてあります）



岩瀬 直樹（いわせ なおき）

1970年、北海道生まれ。東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了。埼玉県公立小学校教諭として、4校で22年間勤め、学習者中心の授業・学級・学校づくりに取り組む。2015年に退職後、東京学芸大学大学院教育学研究科教育実践創成講座 准教授として就任。学級経営、カリキュラムデザイン等の授業を通じて、教員養成、現職教員の再教育に取り組んだ。2016年12月に一般財団法人軽井沢風越学園設立準備財団を設立し副理事長就任。2019年10月に学校法人軽井沢風越学園設立、校長・園長就任予定。日本教師教育学会所属。



2nd

- リーディング校の取組
- (1) 飯田市立上村小学校 事例①② +
 - (2) 木曽町立三岳小学校 事例③④ +
 - (3) 栄村立栄小学校 事例⑤⑥⑦ +

Whose Room? のお話を聴いて手紙に読み聞かせよう

英語入会式に、英語学習の意欲を高め、英語学習の楽しさを伝える。

学習のねらい:

- 「Whose Room?」の物語を聴き、物語の登場人物や、お部屋の名前や、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
- 「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
- 「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。

教材:

- 「Whose Room?」の物語 (英語版、日本語版)
- 「Whose Room?」の物語 (英語版、日本語版)
- 「Whose Room?」の物語 (英語版、日本語版)

学習のねらい:

- 「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
- 「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
- 「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。

学習のねらい	学習のねらい	学習のねらい	学習のねらい
「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。

○活用した教材・コンテンツ・ICT機器等のねらいは授業準備にいかせそうなことを記述しました。

○学習者のユニットとその意図では、児童生徒の学習形態や意図について記述しました。

○活用効果 (アセスメント) では、評価の観点や具体的変容について記述しました。

○実践の手応え (エビデンス) では、学びによって授業者が感じる成果について記述しました。

Whose Room? のお話を聴いて手紙に読み聞かせよう

英語入会式に、英語学習の意欲を高め、英語学習の楽しさを伝える。

学習のねらい:

- 「Whose Room?」の物語を聴き、物語の登場人物や、お部屋の名前や、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
- 「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
- 「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。

教材:

- 「Whose Room?」の物語 (英語版、日本語版)
- 「Whose Room?」の物語 (英語版、日本語版)
- 「Whose Room?」の物語 (英語版、日本語版)

学習のねらい:

- 「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
- 「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
- 「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。

学習のねらい	学習のねらい	学習のねらい	学習のねらい
「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。
「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。	「Whose Room?」の物語を聴き、お部屋の様子について、英語で話せるようになる。

事例①

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
4 年	社会科『郷土の発展につくす』		飯田市立上村小学校
実践スタイル	遠隔会議システムを用いたそれぞれの地域の特色の紹介および、比較による学びの深化。		

本時のねらい

それぞれの地域の発展に尽くした人について知った子どもたちが、違っていることや共通することに関心を持って比べ、伝え合うことで、それぞれの人の郷土への思いや、地域の人々の感謝の思いに気付くことができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ・遠隔会議システム xSync Prime Academic(バイシンク プライム アカデミック)
- ・電子黒板・書画カメラによる資料提示

意図

- ・遠隔会議システムを使って和田小学校・天龍小学校の児童と交流し、自分の考えを伝えたり他校の仲間の考えを聞いたりする。そして、友の考えと比較することで、自分の考えを深める。

学習者のユニットとその意図

上村小学校（1名）、和田小学校（5名）、天龍小学校（4名）の4年生は、集合学習や遠隔合同学習とともに学び、互いの学習の様子や地域のことには関心がある。そこで、それぞれの学校で調べた郷土の発展に尽くした人を、遠隔会議システムを通して紹介し合うことで、自分たちの地域の学習から、発展して他の地域の人々についても関心を持ってほしいと考えた。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
1 学習問題を つかむ	・赤石林道ができるまでの上村の暮らしについて知る。 ・単元の学習計画を作る。	・自律した個の学び	2 時間
2 調べる	・地域の方の話から、赤石林道ができる前の様子や人々の思いを知る。 ・松下逸雄さんや歴代の村長が、道を開くことに力を注いでいたことを知る。 ・松下逸雄さんについて、資料を調べたり地域の方に話を聞いたりする。 ・赤石林道ができた後の上村について、当時の様子を知る方から話を聞く。	・自律した個の学び	7 時間
3 まとめる	・松下逸雄さんのはたらきや道路ができたことによる生活の変化を年表にまとめる。	・自律した個の学び	2 時間
	・他校の発表を聞き、他地域の発展に尽くした人について、学び合う。	・遠隔合同の学び	2 時間

事例①



他校の発表を集中して聞き、学習カードに書き込みしているN児



書画カメラと電子黒板を用いた板書や資料提示



担任に加え、各校職員や主事も参加した研究会

児童生徒の学び（全国へき地教育研究大会の姿から）

上村小学校4年生A生は、1名の学年で、社会科をはじめ多くの授業をそれぞれの教科担当と一対一で行っている。その影響もあるのか、自分のペースで勉強ができる反面、人から話を聞いて学ぶことにはなかなか意欲が持てないでいた。

今回、初代上村村長の松下逸雄さんについて学習していく中で、同じ時期に南信濃や天龍村でも、生活が苦しかったり災害に苦しんでいたりと問題を抱えていたことを知り、A生は他地域のことに興味を持つようになった。和田小学校や天龍小学校も同様の学習をしているのではないかと考え、自分から遠隔合同学習を提案した。日程を合わせて遠隔学習を行う事が決まると、A生は課題を持って取材活動を行うようになり、積極的に話を聞こうとする姿を見せるようになった。これは「伝えたい」というだけでなく、「松下逸雄さんとのつながりを知りたい」という意欲が、A生の中に芽生えたからであろうと思われる。

遠隔合同授業においても、意欲的に他校の友だちの話を聞いたり、資料にくぎ付けになったりする様子が見られた。天龍村の熊谷長三郎さんが防災のために植林を始めたことを聞くと、「松下逸雄さんの道作りも、災害から地域を守るためだった。同じなんだ」と気づき、自らも調べていた「当時の人々が災害に悩まされていたこと」などを振り返っていた。また、「上村は災害により仕事を失う人が多かったこと」と「南信濃地区が近藤知三郎さんの尽力で、働く場所や娯楽施設が多くなったこと」をつなげ、郷土の発展と防災、就労につながりがあることを感じる事ができていた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	遠隔会議システムを使って話し合ったことで、各校の児童が調べた3人(松下さん、熊谷さん、近藤さん)に、郷土を守ろうという共通した思いがあることに気付くことができる。
具体的変容	・他の学校の発表を聞くことで、どの地域にも郷土を守りたいという思いから尽力した人がいることが分かった。 ・郷土の発展は他地域のつながりだけでなく、防災や就労も関わりがあることに気付いた。

実践の手応え（エビデンス）

三校それぞれでまとめたものを発表し合うことで、自分たちの地域だけでなく、他地域の様子にも、さらに関心を深められるようになった。また、それぞれが調べた人の思いだけでなく、地域の発展には防災など様々なことが関わってくることに気付くことができた。

学習環境面においては、電子黒板での板書や複数の通信機器の活用など、これまでとは違った試みがなされた。引き続きよりよい学習環境や研究会のあり方を考えていきたい。

5 年「電流のはたらき」と 6 年「電気の利用」を同時に進める異学年合同の学び

実践スタイル

複式学年別指導における一人一人の個性に合わせた自由進度学習での取組

学習者のユニットとその意図

5 年生男子 2 名、女子 1 名、6 年生女子 1 名、合計 4 名での複式学級として日々の学習を進めている。その中で、理科も 5, 6 年生一緒に進めているが、小規模特認校の関係で児童の転出入を考慮し、複式学年別学習として取り組んでいる。

単元のねらい

5 年：電流は鉄心を磁化する働きがあることや電磁石にはその極や強さに特性があることがわかる。
6 年：発電や蓄電、電気の変換について理解し、効率的な電気の利用を考えることができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

5 年：主体的に動きやすくするために、単元全体に渡って学習に使う物（電磁石、鉄心、導線、検流計、電流計、モーターなど）を児童の近くに準備する。

意 図

6 年：5 年と同じに準備しておく。効率的な電気の利用の確認のため、手軽に準備がしやすく試しやすい micro:bit でプログラミングができる環境を整える。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
学習計画	・単元のガイダンス ・個々による単元全体の学習計画	・異学年合同の学び	1 時間
追 究	・自分の計画を参考に個々に学習の追究をする。(自由進度学習)	・自律した個の学び	13 時間
	・自分の計画を参考に発展学習をする。(時間に余裕がある場合)	・自律した個の学び	上記 13 時間に含む
まとめ	・単元全体の振り返り ・学習発表会	・異学年合同の学び	1 時間



ノーベル化学賞の新聞を見ながら、リチウム電池の話で盛り上がる 5・6 年生



街灯のプログラミングをし、点灯・消灯の丁度良いタイミングを探し続ける 6 年生



棒磁石にできるだけ釘をつけようと、納得のいくまでやり続ける 5 年生

児童の学び（全国へき地教育研究大会の姿から）

5 年生 A 生は、導入時から 6 年生の学習に関心が高く、「早くモーターカーをつくりたい」と言っていた。学習計画でも発展学習に「モーターカーをつくる」とだけ書いた。しかし、追究を雑にすることはなく、自分のペースで、こだわりながら学習カードに書かれている実験に集中して取り組んでいた。電磁石や棒磁石に釘をつける場面では、釘のつき方や本数にこだわり、時間をかけてじっくり確かめていた。その分ややゆっくりペースになりがちであったが、終わるべきところまでは間に合わせることができた。学習カードへの記録が不十分な場合は、チェックのところで教師が支援したが、書いていないだ

事例②

けで理解していることがほとんどだった。楽しみにしていたモーターカーづくりでは、スピードを速くしようと試行錯誤を繰り返していた。意欲が切れることはなく、振り返りの中で最後まで次への目標を進んで決めることができた。単元終わりのテストでは初めて満点をとることができた。全体の振り返りで「この学習のやり方は、ぼくに合っている。とてもよくわかった」と言った。思うようにいかず困ったこともあったが、自分のペースでできたことが、確かな学びにつながったのではないと思う。

6年生B生は、もともと1名だけなので「一人学び」が続く自由進度学習にはさほど新鮮味がなかったようだ。しかし、個々の学習計画を立てる時には、今までのやり方と違っていたので、「自分のしたい実験ができるんだ」と意欲を膨らませていた。何事も確実にこなしていく児童なので、教師は確認することのみで、ほぼ自分の力で計画通りに進めていった。学習毎の振り返りも学習内容に沿ってわかったこと等を自分の言葉でまとめることができた。また「なぜコンデンサーに電気はためられるのか」等の疑問も持つことができた。発展学習に入って、風力発電機をつくる計画であったが、発泡スチロールカッターをつくることに変更した。前時に学習した「電気は熱に変わる」で、ろうそくが切断されたことに相当驚いたことが影響していると思われる。最後に効率的な電気の利用ということでプログラミング学習に挑戦した。身近な街灯や防犯灯がプログラムによって動いていることを知った児童は、教師からのヒントカードをもとにmicro:bitを使ってプログラミングをし、街灯や防犯灯と同じような反応をするのか、進んで確かめ、その良さを実感することができた。この学習をして「自分のやりたいことができる。友だちとの協力ができるようになった」と言っており、時間が許す限り、繰り返し実験、自分が工夫した実験、自分がやりたいものづくり等、最初から最後まで主体的に学習に取り組めたことが、確かな学びにつながっているのではないかと感じた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	実験やプログラミングに必要なものを判断し、主体的に取り組もうとする。
具体的変容	一人一人の子どもの近くに器具や材料等が入った箱を置くことにより、子どもたちは自分の計画に沿って必要な器具等を取り出し、自分なりに工夫しながら主体的に取り組めるようになっていった。C生は、電磁石づくりやモーターづくりでうまくいかない時に、必要なものは何かを考え、工夫して解決していこうと繰り返し挑戦する姿があった。A生は、最初、必要なものをすぐ教師に聞いてしまったが、電磁石づくりでこだわりが出てくると自分で必要なものを探し出し、納得がいくまで挑戦する姿があった。B生は、プログラミングで使うブロックの配列で試行錯誤していたが、ヒントカードを参考にプログラミングができ、さらに工夫をする姿があった。

実践の手応え（エビデンス）

自由進度学習は教師も子どもも初めての経験であった。それまでは複式学年別学習で「一人学び」と学び合いをしてきたが、もっと「一人学び」の時間を増やして、子ども一人一人のペースで進めることにより満足感や達成感を味わってほしいという願いを持ち、試してみた。結果は、教師も子どもも自由進度学習に対して良い手応えを感じるものになった。1つめは、単元全体を見通して児童が自分で学習計画を立てることで、関心・意欲をさらに高めることができた。2つめは、追究時、自分のこだわりによって同じ実験を繰り返したり、チェックで教師に言われたことを確認したりして自分のペースで集中して取り組み続けることができた。3つめは、できない、わからないということが続いても自分で何とかしたいという気持ちがだんだん高まり、学習意欲が落ちることなく、最後まで進めることができた。4つめは、「一人学び」であっても、異学年であっても、時には互いに声を掛け合い、進捗状況や励ましの言葉を伝え合う姿が自然に生まれていた。同じ電気関係の学習を組むことで異学年交流を自然に行うことができた。5つめは、ちょっとしたことで、教科書にない、自分の計画にもないことを進んで試みることができた。本来、「自由進度学習は二教科で」と言われているが、複式学年別で行う場合、一教科でも二学年分の準備をしなくてはならないので、複式学年別では上記のような良い手応えが出ていることを受け、一教科で進めていっても良いのではないかと考える。

理科におけるプログラミング教育も初めての経験であった。新学習指導要領の中で例として「電気の利用」、特に効率的な電気の利用についての学習の中で、と言われているが、効率的に電気を利用している身近な街灯や防犯灯に着目したことで、プログラミングのイメージがしやすく、論理的な思考へと結びつけることができた。また、使うブロックのヒントカードを提示することにより意欲が高まり、集中して取り組み続けることができた。micro:bit はシミュレーションでプログラムを確認できたり、本体をパソコンから離して、持ち歩きながらいろいろな場所で試すことができたりするので、追究の幅を広げることに繋がった。

令和元年度 中山間地リーディング校 新たな学び年間計画

飯田市立上村小学校

異学年合同の学び

異学年合同の学び
+ 自律した個の学び

自律した個の学び

自律した個の学び
+ 異学年合同の学び

遠隔合同の学び

集合学習

学 年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月				
1学年	生活・総合的な学習の時間 ICT 「しいたけを育てよう」	学級活動 ICT 「タブレットの使い方」	算数 複式学年別 1年「たしざん(1)」 2年「たし算とひき算のひっ算(1)」	国語 ICT 「漫才」		体育 ICT 「上っ鼓乱舞2019」 (和太鼓)	算数 複式学年別 1年「たしざん(2)」 2年「かけざん」	音楽 ICT 「ミュージカル」	生活 集合学習 「学校探検」	生活 ICT 「発表会に向けて」	生活 ICT 「わたしたちの1年間」					
2学年									算数 集合学習 「三角形と四角形」							
3学年		理科 複式学年別 ICT 3年「植物を育てよう」 4年「生き物のくらし～春～」	社会 ICT 「学校のまわり」				特別活動 遠隔二校 「保健」 (Zoom)		算数 複式学年別 ICT 3年「分数」 4年「小数×小数」				図画工作 ICT 「版画」	道徳 ICT 「漢字に思いをこめて」		
4学年			社会 遠隔三校 「ゴミの行方」 (xSync)				社会 遠隔三校 「郷土の発展に尽くす」 (xSync)								国語 集合学習 俳句「秋の風景」	
5学年		英語 遠隔三校 「自己紹介」 (xSync)	理科 複式学年別 ICT 5年「生命の誕生」 6年「人と他の動物の体」				理科 複式学年別 自由進度学習 プログラミング 5年「電流のはたらき」 6年「電気の利用」		体育 集合学習 「ソフトバレーボール」 道徳 集合学習 「おばあちゃんは無理」				音楽 プログラミング 「作曲しよう」	総合的な学習の時間 ICT 「霜月祭のホームページ作り(ESD)」	算数 複式学年別 プログラミング 5年「円と正多角形」 6年「見積もりを使って」	国語 複式学年別 ICT 5年「表現を工夫して書こう」 6年「話し方を工夫してスピーチしよう」
6学年																
全 校	なかよしドリル（無学年制自由選択式ドリル）															

☆ 上記の年間計画は本校の特徴的な学習をピックアップして見やすく並べたもので、実際は下記のことをふまえながら計画する。

- ※ 複式指導(学年別・同単元)は、年間を通じて個の指導計画に基づき、ICT機器の活用を図りながら連学年(算数・理科・国語)や全校で進めていく。(異学年合同の学び、自律した個の学び)
- ※ 連携校三小学校の集合学習(遠隔学習を含む)は、4月の合同学年会で年間10時間程度の計画をたて、2月に振り返りをする。(異学年合同の学び、遠隔合同の学び)
- ※ 中学校との連携は、遠隔を使った遠山三校合同の外国語学習を学期に1回計画する。(遠隔合同の学び)
- ※ プログラミング教育は、総合的な学習の時間や算数・理科の教科学習の中で進めていく。(異学年合同の学び、自律した個の学び)

事例③

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

2・3年

自分のペースでトコトン学ぼう

木曽町立三岳小学校

実践スタイル

単元内自由進度学習（一人学び）による自己学習力を高める学び
【2年：国語、生活 3年：算数、理科】

学習者のユニットとその意図

単元内自由進度学習とは、「学習の手引」に示された単元目標や学習内容を参考に、決められた時数内で単元の学習が終わるように自分で学習計画を立てて自分のペースで「一人学び」を進めていく学習である。

少人数学級では、個がよく見えるために必要以上の支援を行ってしまい、受動的な態度を育て、自分で考え抜く力を奪ってしまいがちである。そのため、単元内自由進度学習（一人学び）を設定し、自律的に学ぶ力（自己学習力や学習を見通す力、計画力）を育てていくことを目指した。「一人学び」を支えるために、次の点を工夫した。

- ① 学習への興味関心や意欲を高めるためのガイダンス（導入）
- ② 学習内容の見通しをもち、計画的に取り組んでいくための学習の手引や計画表の準備
- ③ 自分で学習問題を読み解きながら自学できるための学習シートの作成
- ④ 学習意欲の持続や学習内容を活用し学びをつなげていくための発展学習

また、複式学級での新たな学習指導としてカリキュラムに取り入れられるかを検討するために、複数学年で同一時間、同一学習空間での授業実践も設定した。【5年理科「ふりこ」、6年理科「てこのはたらき」】

本時のねらい

- ・2年：国語「しかけカードの作り方」、生活科「おもちゃ作り」※二教科同時
- ・3年：算数「おもさ」、理科「ものの重さをくらべよう」※二教科同時

自分で立てた学習計画に従って取り組む中で、自分が抱いた問題を解決するために自分なりに方法を選択して納得いくまで追究したり、友だちと学び合ったりすることで、学習内容を理解していく。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ・学習の手引 ・計画表 ・学習シート ・関係する図書
- ・学習環境（見本、学習に関連した問題や情報、発展学習）

意 図

- ・一人学びを進めていくためには、追究の助けとなる学習材が必要であり、個の特性や追究の状況に応じて自分で選択できるように準備しておく。

単元の流れ	主な学習活動（時数）		・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び
	2年生（18時間）	3年生（13時間）	
1 導入（全体）	○ガイダンスをする ・単元内容に関わる導入をする ・単元の目標・学習内容を確認する ・学習計画を立てる	○ガイダンスをする ・単元内容に関わる導入をする ・単元の目標・学習内容を確認する ・学習計画を立てる	・自律した個の学び
2 追究（個人）	○学習の手引に従って学習を進める ①しかけカードを作る ②作り方を説明する ③作るおもちゃを選んで作る ④おもちゃの作り方の説明を書く ⑤発展学習（好きなおもちゃ作り、おもちゃアレンジ）	○学習の手引に従って学習を進める ①重さの測り方や計器のメモリの読み方を確認する（全体） <u>※算数か理科を自分で選んで学習する</u> ②重さの計算をする【算数】 ③ものの重さをくらべる【理科】 ④発展学習（やじろべえ作り、ダンベル作り、1人分のお菓子作り）	
3 まとめ（全体）	○学習したことを振り返る	○学習したことを振り返る	

事例③



写真1：学習シートを見ながら1人でしかけカードを作る（2年生）



写真2：一斉授業の時とは違う子ども同士の関わり合い（2年生）



写真3：児童がワクワクするような学習環境の工夫



写真4：学習への興味関心や意欲を高める導入の工夫（3年生）



写真5：一人でやり遂げられた喜びを先生に伝える児童（3年生）



写真6：学習したことを生かしてお菓子作り（発展学習）（3年生）

児童生徒の学び（自律した個の学び）

自由進度学習では、その時間に自分が学習することを自分で確認して進めていかなければいけないので、人任せにすることがなく、自分なりに問題を読み解いて学習を進めようとする様子が見られた。また、追究の時間は教師による時間で区切られているわけではないので、上手いかないときにはやり直したり、納得がいくまで繰り返したりすることができるため、学習内容を自分なりに理解しようと努力することができていた。それと、1つの実験や課題、単元の学習内容を自分の力でやり遂げられたことから、達成感を味わうこともできていた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	学習の手引に従い、個のペースで学習を進めていくことで、主体的に学習に取り組み、学習する力ややり遂げた達成感を味わいながら、学習内容を理解することができる。
具体的変容	これまでは「できる人」が中心となって授業が進んでいたことが、一人一人に学ぶ機会が保障されることで、自分で進めなければならない状況が意図的に生まれ、問題を自分なりに読み解きながら解決しようとする学習力を高め、達成感を味わうことができた。

実践の手応え（エビデンス）

一般的に行われている一斉学習では見られなかった学習に取り組む姿が、自由進度学習では見られることがある。どうしても周りの子と同じペースで進めていくことが難しい子も、自分のペースで学習が進められることで、教室の中でも安心して学ぶことができ、時にはいつもとは立場が逆転して教え合うようなことも生まれることがある。

自己学習力が高まっていくと集団学習の質も高まっていくのではないかと考えられるので、様々な学習方法をバランスよくカリキュラムに編成していくことが必要である。

事例④

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

3・4・5・6年

他学年の書き方の良さをまねよう

木曽町立三岳小学校

実践スタイル

異学年との学びによる新たな見方や考え方への気づきと学習意欲の向上
【3・4・5・6年生 書写】

学習者のユニットとその意図

4つの学年（3・4・5・6年）合同で行うことで、今年度から毛筆を始めた3年生も、上級生の書き方を手本にして良さを真似しようとしたり、上級生は、下級生の見本となれるように姿勢や書き方を普段よりも意識して取り組めたりするのではないかと考えた。また、上級生や下級生関係なく、書写が得意な児童が、同学年だけでなく他学年の児童からも認められることで、自己肯定感を高めたり、他者の良さに気づき、それを認め合える関係を築いたりする機会になることも願った。

また、4つの学年合同にすることで、指導や支援にあたる職員が増えるため、個に応じた支援がしやすくなったり、専門性を活かした指導を行えたりすると考え、設定をした。

本時のねらい

書写を4つの学年合同で行うことで、他学年の習字の良さに気づき、それを自己の練習に活かしながら、課題の文字を丁寧に書くことができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ・模造紙大の手本
- ・電子黒板（タイムスケジュールや振り返りの仕方の提示）
- ・付箋

意 図

- ・模造紙大の手本は、教室より広めの多目的ホールで学習をするため、少し離れた場所からでも見えるようにした。付箋は、振り返りで同学年や他学年の友へ、感想を記入して伝えるために用意した。タイムスケジュールを提示することで、見通しをもちながら自分で学習を進められるようにした。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
1 学習問題の把握	・学年ごとの目標を知り、書く時に気を付ける点を確認する。	異学年合同の学び	2 時間
2 追究	・気を付ける点を意識して取り組む。		
3 まとめ	・作品を見合い、感想を伝える。		

事例④



写真 1：学年ごとに目標や書く時に注意することを確認

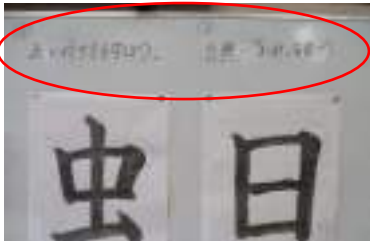


写真 2：学年ごとに設定された目標



写真 3：異学年で座席を配置



写真 4：追究の中で再度押さえたいことがあれば、その学年だけを集めて指導



写真 5：個に応じた支援

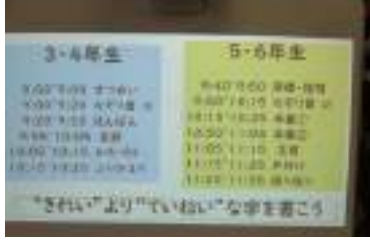


写真 6：学年ごとのタイムスケジュールを電子黒板で提示

児童生徒の学び（異学年合同の学びによせて）

異学年合同で学習することで、いつもとは違う緊張感で授業に臨んでいる児童が多くいた。隣に座る他学年の様子を見ることで、「もっときれいに書きたい」や「6年生みたいに書きたい」など、より高い目標を設定して書こうとする様子が見られた。また、下の学年が上の学年の書き方を参考にするだけでなく、逆に上の学年が下の学年の良さに刺激を受け、手本や目標を意識しながら、より集中して取り組む姿もあった。中には、隣の友だけでなく別の学年の様子を見て回ったり、書き方を教え合ったりする児童もいた。

書き終えた作品を見合う場面では、自分の振り返りを赤の付箋に、友の作品への感想を青の付箋に記入し、渡していた。画の書き方の良さや字のバランスなどに着目して作品を見合うことができていた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	異学年合同で学習することで、学習意欲を高めたり、他者の良さに気づき、それを認め合ったりすることができたか。
具体的変容	異学年合同での学びはいつもとは違う人間関係ができるため、緊張感や意欲が生まれたり、丁寧に書く気持ちや集中力が高まったりしていた。他学年の習字の良さに気づき、それを生かそうとする気持ちも生まれてきていた。

実践の手応え（エビデンス）

異学年合同で学習を組むことで、複数の職員で、より細やかに個に応じた支援を行うことができる。時には、空き時間として活用できるようになると良いかとも思う。少人数学級で学年内では人間関係の組み換えができない環境においては、異学年合同での学習を意図的に仕組んでいくことも必要である。

中山間地リーディング校 「おんたけ」プラン（年間計画）

木曽町立三岳小学校

異学年合同の学び

異学年合同の学び
+ 自律した個の学び

異学年合同の学び
+ 遠隔合同の学び

自律した個の学び

自律した個の学び
+ 異学年合同の学び

遠隔合同の学び

集合学習

集合学習
+ 異学年合同の学び

学 年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1学年			音楽 異学年合同 「音楽会に 向けて」 (合奏・合唱)	図画工作 異学年合同 「造形遊び」	生活 異学年合同 集合学習 「学校交流」	体育 異学年合同 「運動会に 向けて」 (表現)	生活 異学年合同 集合学習 「生活科遠足」 ※王滝小	図画工作 異学年合同 集合学習 「造形遊び」 ※王滝小		生活 異学年合同 集合学習 「はがき作り」 ※王滝小		
2学年									国語・生活 自由進度学習 二教科同時 「おもちゃ作り」			
3学年	外国語活動 異学年合同	国語 異学年合同 「書写」		国語 異学年合同 「書写」	特別活動 集合学習 「学校交流」 ※王滝小		国語 異学年合同 「書写」	図画工作 異学年合同 集合学習 「造形遊び」 ※王滝小	算数・理科 自由進度学習 二教科同時 「重さ」	国語 異学年合同 「書写」		総合的な 学習の時間 異学年合同 「一人総 合」
4学年			音楽 異学年合同 「音楽会に 向けて」 (合奏・合唱)		総合的な 学習の時間 異学年合同 集合学習 「御嶽山に ついて」 ※王滝小	体育 異学年合同 「運動会に 向けて」 (表現)			理科 自由進度学習 「ものの あたまり方」			
5学年								体育 異学年合同 集合学習 「ボール 運動」 ※王滝小	理科 自由進度学習 「ふりこ」		特別活動 遠隔合同 「児童会会長選挙」 ※王滝小	
6学年			特別活動 遠隔合同 「児童会祭り について」	算数 自由進度学習 「円の面積」					理科 自由進度学習 「てこの はたらき」		体育 集合学習 「スキー」 ※王滝小	
全校	体育 異学年合同 「体ほぐし運動」	体育 遠隔合同 「運動会表現」 王滝小→三岳小	音楽 遠隔合同 「合唱表現」 三岳小→王滝小	特別活動 集合学習 「児童会祭り」 ※王滝小		体育 遠隔合同 「運動会表現」 三岳小→王滝小		特別活動 集合学習 「児童会祭り」 ※福島小		体育 異学年合同 「体ほぐし運動」		
おんたけ学習（無学年制自由選択式ドリル） 異学年合同・自律した個の学び												

※印・・・集合学習や遠隔合同学習をおこなう時の相手校

事例⑤

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

5 年

わたしたちの国土(発展的な内容)

栄村立栄小学校

実践スタイル

主体的・対話的で深い学びのグループ学習を遠隔合同の学びで実現

学習者のユニットとその意図

栄小学校 4 名、秋山分校 1 名、飯山市立東小学校 1 名の 3 つの学級を、Web 会議システムを利用して、2 グループ構成にした。2 グループは、栄小学校、分校、東小学校各 1 名を Web 会議システムで結んだオンライングループと、栄小学校の 3 名で構成したオフライングループである。秋山分校、東小学校の通常授業では、実現することのできないグループ学習を行った。

単元のねらい

様々な土地のくらしの工夫や特徴を学習した児童たちが、資料から特徴を探しだす場面で、見つけた特徴をヒントに、地図帳や資料集を手がかりにして地域を探すことを通して、グループで予想した地域について根拠を示しながら説明することができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

5 つの資料、社会教科書、地図帳、資料集、Web 会議システム

意 図

・手がかりとなる資料から取り出した情報をもとに、地図帳や資料集から追加情報を得て、集めた情報を関連付けて考える情報活用能力を育成する。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
低い(高い)土地のくらし、国土の気候の特色、あたたかい(寒い)土地のくらしについて、調べてまとめる学習をしてきた児童が、発展的な学習としてグループ学習を行う。	・手がかりとなる 5 つの資料（都市の雨温図、写真、イラスト、新聞記事等）から地域に関する特徴を見つけ出し、地図帳や資料集を手がかりにして地域を特定する。	遠隔合同の学び	1 時間



グループ構成
(左側がオンライングループ)
栄小学校にて撮影



(5 つの資料)



ICT を活用した東小学校の様子
東小学校にて撮影

事例⑤

児童の学び（遠隔合同の学びによせて）

グループごとに活発な話し合いが行われた。5つの資料から、ヒントになりそうなことを出し合っていて、そのヒントに関連する追加情報（地図帳、資料集などの資料）を探し出すことができた。それらの資料を関連付けて、最終的な結論を出していた。

成果としては、グループ学習により、それぞれの子どもが取り出した情報と追加情報をもとに、自分たちで課題を解決することができたことがあげられる。秋山分校と東小学校の児童は、通常、担任と一対一の学習環境になっている。そのような環境では自分一人の考えで授業が進み、新しい考えに気付いたり、自分の考えが深まったりすることが少ない。今回、オンラインによるグループ学習を成立させたことで、自分の考えを示すだけでなく、他者の考えと合わせて吟味しながら、担任がほとんど出ることがなくても子どもたちが協力して課題を解決していける授業となった。

課題としては、個に応じた課題の設定である。以前同じような展開で授業を行ったときに、グループで中心となって話し合いを進めていた児童（以下A児）が、本時ではあまり自分から話す様子が見られないということがあった。これは恐らく資料が難しくなったためだと考える。難しくなったことで話し合う意識が高まった児童がいた一方で、A児にとっては自分の意見が言えなくなり、逆に学習を妨げてしまうこととなった。今回の授業では難しい資料を与えた上で、A児の実態に寄り添った支援を考える必要があったと思われる。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	遠隔合同の学びによって、自己の学びを振り返るとともに、新たな視点や考え方にふれることができる。
具体的変容	自分で取り出した情報と友だちからの追加情報をもとに、自分たちで課題を解決することができた。自分の考えを示すだけでなく、他者の考えと合わせて吟味しながら、さらに理解が深められたり、新たな視点に気付いたりすることができた。

実践の手応え（エビデンス）

通常、児童と担任が一対一の学習環境になっているが、Web 会議システムを利用して、複数の学級を結ぶことで、すぐそばにいてグループ学習をしているかのような自然な学習環境を整えることができた。日常的・継続的に遠隔合同の学びを行うことで、より主体的・対話的で、深い学びにつなげられそうだ。

5年 世 金 7月13日（金）

学習問題 資料から特徴を探しだそう。

グループメンバー _____

学習の進め方

- 先生の指示で、ふうとうの中身を確認します。

入っているもの

資料5枚（すべて同じ都道府県の、ある地域の写真です）

- 5枚の資料から、ヒントになりそうな手がかりを探し、気付いたことを資料の空いているところに書きましょう。

③ 見つけたヒントと地図帳や資料集を手がかりにして、

- ① **どこの都道府県で、**
- ② **どの市町村なのか** を探しましょう。

④ グループごとに考えたことを発表しよう。

- ① まず、グループで考えた地域を書きます。（例：〇〇県〇〇市）
- ※ 地図帳で、〇〇県〇〇市を探します。
- ② 次に、資料から見つけた特徴を書い、そこから、どうしてその地域だと思ったのかを説明してください。

⑤ 答え合わせ・今日のふりがえり

この写真には、どんな特徴があるから、この地域だと考えられるのか。

事例⑥

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

6 年

算数の単元末自由学習

栄村立栄小学校

実践スタイル 個の課題解決型学習と遠隔合同の学びによる主体的・対話的な学び

学習者のユニットとその意図

自律した個の学習を行うために、個別学習の時間を2時間確保する。課題の設定、取り組み方について、自分で考えて決定する。

個の学びの振り返りとして、遠隔合同の学びの場を設定し、お互いの学習成果を紹介すると共に、意見や感想の交換を行う。

単元のねらい

算数の単元学習を終えた児童が、自分で課題を設定し、課題への取り組み方を考えて、学習を行うことを通して、主体的に学ぶ姿勢を培う。また、個の学習成果を発表し合うことで、自分の学びの価値や新たな視点に気付くことができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

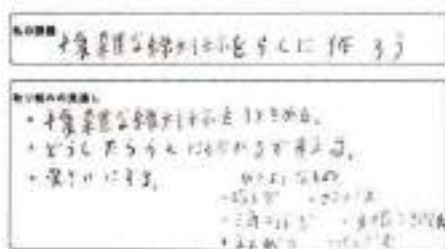
教材等

算数教科書、ドリル、問題集、Web 会議システム、書画カメラ

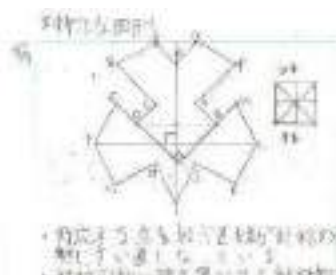
意 図

個の課題に取り組み、その学習成果を友だちにわかりやすく伝える。

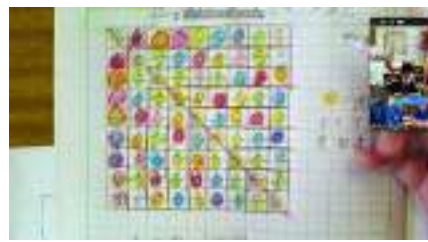
単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
各単元末に自律した個の学びの時間を2時間設定する。 自律した個の学びの後、遠隔合同の学びの時間を持ち、お互いの学習成果を紹介し合い、意見交換を行う。	・課題を設定し学習計画を立てる。 ・課題解決に取り組む。	自律した個の学び	2 時間
	・Web 会議システムを利用して、個の学びの成果を発表し、意見交換を行う。	遠隔合同の学び	1 時間
	実施した単元（4月～6月） 対称な図形、文字と式、分数×分数 ※単元内における進度調整により、単元末自由学習の時数が生み出せた。		



自分の課題を明示し、2時間で取り組む学習内容の計画を立てる。
(学習カード)



対称な図形について、「教科書にはない線対称や点対称のきまりを見つけたい」という課題を持ちまとめた。
(児童ノート)



分数を表に示しながら、線対称になるペアの数が逆数になっていることを説明していた。
(スクリーンショットより)

事例⑥

児童の学び(自律した個の学び, 遠隔合同の学びによせて)

昨年度2学期, 算数の「単元内自由進度学習」に取り組んでみた。子どもたちは, 教科書の問題を解くことが勉強することだと思い, ページを進めることが最優先になっていることがうかがえた。また, 問題を解くことができても学習した内容について説明を求めると, 理解があやふやに感じられるようなこともあった。そこで今年度は, 単元の学習を一通り終えてから, 自分で課題を設定して, 見通しをもって学習する「単元末自由学習」に取り組んでみた。

単元を一通り学習してからであったので, 自分の課題を設定しやすかったと思われる。「対称な図形」では, 「難しい点対称な図形を描く」, 「教科書にはない線対称や点対称のきまりを見つけたい」, 「もう一度線対称や点対称の復習をして確認したい」という個々の課題をもつことができた。これは, 個のペースで学ぶということに加えて, 「個の学び」を保障する時間となったように思われる。この授業の後の学級だよりには, 「…何より, 子どもたちの集中力がすごかったです。一人一人の課題が違ったので話し合う姿はありませんでしたが, 全員黙々と進めていました。最初の1時間は授業が終わっても続けようとしていましたので, 2時間目もスムーズに取りかかることができました。…」と書かれていた。児童の主体的な学びの姿が見られ, 子どもにとって必要感のある時間だったと推測できた。

また, 「分数×分数」では, 逆数について考察した児童がいた。分数を表に示しながら, 逆数が線対称となる数のペアになっていることを説明していた。これまでの単元で学んだことと関連させており, 深い学びの姿が見られる。また, 「2つの分数をかけてもひいても答えが同じになる分数」を見つけることを課題とした児童は, 「分子が1で, 分母が連番になっている分数」がそれに該当することを見つけた。そこで, さらに, 「分子が1でない場合」, 「分母が連番ではない場合」, 「分母が同じで分子が違う場合」についても検証を行った。同じ課題を設定していた児童から, 「自分の予想していた通り, 分子が1で, 分母が続いている2つの分数が, かけてもひいても答えが同じになる分数だと分かったら, そこでやめてしまったけれど, A君は, 同じにならない場合も考えていてすごいと思った。」と感想が述べられた。新たな視点に出会った驚きを感じられる。

活用効果 (アセスメント)

評価の観点	自律した個の学び, 遠隔合同の学びによって, 自己の学びを振り返るとともに, 新たな視点や考え方にふれることができたか。
具体的変容	自分で課題を設定して見通しをもち, 取り組み方を考えながら学んだり, 友だちの学びに触れたりすることで, さらに理解が深められたり, 新たな視点に気付いたりすることができた。

実践の手応え (エビデンス)

単元で学習したことを理解したつもりになっていた児童が, 自分で課題を設定し, 解決に取り組む学習活動を通して, 曖昧だった理解が確実なものとなったり, 自信をもって問題に取り組めるようになったりしており, 学習した内容の定着が図られている様子がうかがえた。また, 友だちの学びについての発表を聞くことで, 同じ課題に取り組んでいても自分と視点が違うことに気付けた様子がうかがえた。

本実践のねらい

遠隔ミニビブリオバトル(書評合戦)を通して、「読む、聞く、話す」というコミュニケーション力を向上させるとともに、他校児童との交流を図ることができる。また、読書への関心を高めたり、読書の幅を広げたりすることができる。

遠隔ミニビブリオバトルの広がり

2018年12月、栄小学校5年生でのミニビブリオバトル開催にあたり、定期的に遠隔合同授業を行っていた飯山市立東小学校児童に、個々の児童の発表を参観してもらい、感想やアドバイスを得るという授業を行った。そこから、遠隔合同の学びの具体として、飯水地区に広げることを考えた。

2019年7月、遠隔合同授業実績のある3校に飯山市立木島小学校を加えて4校で実施した。実施にあたり、飯水地区小中学校と飯山養護学校には、Web視聴可能であることを周知した。飯山小学校児童の聴講参加を含め、5校からの接続があった。10月の飯水地区8小学校での実施にあたっては、飯水視聴覚教育協会の事業として実施することを校長よりアドバイスされ、各校委員から技術的な支援を得た。

参加した児童からの「もっと遠い学校とやってみたい」、「他の学年とやってみたい」という願いを実現すべく、中山間地リーディング校に声をかけ、参加を希望した5学級とあわせて7校で、11月実施した。

バトルの流れ	実施概要	参加者	形態
司会進行は、代表児童が行う。 ・開会 ・発表順の確認 ・本の紹介 3分間の発表 + 1分間の ディスカッション ×人数分 ・チャンプ本の決定 ・チャンプ本紹介者 コメント ・閉会	四校による実施(7/4実施, 18分間) ・司会：栄小図書委員長	栄小, 秋山分校, 飯山市立東小, 木島小 発表者は6年生 (飯山小は聴講参加)	休み時間の活動 参観は自由
	第1回飯水小学校遠隔ミニビブリオバトル(10/9実施, 40分間) ・司会：栄小図書委員長 ＊飯水視聴覚教育協会事業として実施	飯水地区八小学校 6年生(1校のみ4年生)	1時間の授業として 学級・学校ごとに参観
	第2回遠隔ミニビブリオバトル(11/27実施, 40分間) ・司会：秋山分校6年児童 ・発表順の抽選 ・発表者6名のため ディスカッション2分間	飯水地区五校六学級, 木曾町立三岳小学校, 飯田市立上村小学校 発表者は3～6年生 聴講参加者は1～6年生	



木島小児童による紹介場面<校名, 木島小ギャラリー加工>
(4校・ギャラリービューのスクリーンキャプチャ)



学級ごとにチャンプ本を決定
(第2回・栄小5・6年)

事例⑦

実施後のアンケート自由記述からうかがえる児童の学び

①つながる喜び

「ちがう小学校の人が近くにいる感じがして、とても楽しかった。」

「他の学校とはなれていても会話ができて楽しかった！
これなら、遠くの学校でもなかよしになれる。」

②広がる楽しさ

「人数が増えるとゴチャゴチャしてしまうけど、増える
ことによっていつもの遠くくよりもおもしろかったし、楽しかった。」

「四校合同のビブリオバトルよりも学校の数が増え、紹介された本も増えて、いろんな分類の本が紹介されて、自分の読みたいと思った本が増えて良かった。」

③新たな見方、考え方をもつ

「人数の分、考え方も色々あると思うので遠隔授業をぜひまたやってみたい。」

「いつも読む本のジャンルなどが決まっていたので、今回のミニビブリオバトルでいつも読まない本を読んでみればおもしろいかも。」

④感動、感心する

「どの学校も一生けん命にやっていて、すごく良いなー。」

「みんな初めてのビブリオバトルですごくはっきりしゃべれたし、質問もたくさん言えてすごい。」

⑤気付く

「1台のパソコンで、場所がはなれた8校と話せるのがすごい。」

「今の時代は、インターネットを使って遠隔でも話が出来る事がすごい。」

⑥意欲をもつ

「みんなと交流して本を紹介したい。」「今度は、私も本を紹介したい。」

「最初は、ビブリオバトルは何かなと思ったけど、いろんな学校で本を紹介していて、どれもおもしろそうだったから、読みたいと思った。」

⑦新たな学びへの願いをもつ

「テーマを決めて」、「ちがう授業(算数、国語など)で」、「ちがう学年と」という記述が見られた。

⑧考える(問題点を指摘する、自己の考えをもつ)

「最初の人などが最後の方に忘れてしまうので、最初にやった人が不利だと思う。」

「ビブリオバトルをすれば本を読む機会が増えると思う。」



チャンプ本決定直前の紹介本提示場面
(第2回・スクリーンキャプチャ)

実践の手応え(エビデンス)

3回にわたり、エリアや学年を広げて実践できた要因として、以下の3点を考えている。

- ・児童にとって価値のある学びであった。
- ・学級担任の負担が少なく、やってみたいと思えるものであった。
- ・各学校にあるICT機器だけで実施でき、機器準備に関わる時間的なロスが無かった。

学級担任からは、「今までに経験したことのない学習スタイルがとても新鮮」、「学級でいつも同じメンバーで授業をしているので、このような形で、違う人との関わりも有効」、「授業の一環として、クラス内でもビブリオバトルをすることで楽しみながら本と触れ合うことができる機会になった」等の感想が寄せられた。教師も新たな学びの可能性を感じていたことがうかがえる。

児童の学びがどんなものであるかを考え、アイデアを出し合い協働的に実践することで、遠隔合同の学びを広げていくことができる。

中山間地域リーディング校 新たな学び年間計画

栄村立栄小学校

異学年合同の学び

異学年合同の学び+遠隔合同の学び

自律した個の学び

自律した個の学び+異学年合同の学び

自律した個の学び+遠隔合同の学び

遠隔合同の学び

集合学習

遠隔合同の学び+異学年合同の学び=飯水遠隔ミニビブリオバトル

学 年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
1学年	生活 「なのはな えんそく」	体育 「表現・ ダンス・ 運動会 得点種目」				生活 「東部だに えんそく」	音楽 「合唱・音楽会」	図画工作, 体育 (全題材, 単元)			体育 「クロスカントリー スキー・ アルペンスキー」			
2学年			国語 遠隔合同 「ともこさん はどこかな」	生活 集合学習 「ようこそ 栄小へ」 ※東小訪問										
3学年	国語 遠隔合同 「よく聞いて 自己紹介」	体育 「表現・ 組体操・ 運動会 得点種目」				社会 遠隔合同 「栄村と飯山市」	音楽 「合唱・音楽会」	図画工作, 体育 (全題材, 単元)			体育 「クロスカントリー スキー・ アルペンスキー」	総合的な 学習の時間 遠隔合同 (学習発表) ※東小		
4学年			社会 遠隔合同 「消防・警察 の仕事」											
5学年			総合的な学習の時間 遠隔合同 「海の学習・佐渡へ」				算数 「自由進度学習」	音楽 「合唱・音楽会」	体育 自律した 個の学び ICT 「マット運動」	図画工作, 体育 (全題材, 単元)	体育 「クロスカントリー スキー・ アルペンスキー」			
6学年	遠隔合同 算数 「単元末自由学習」				国語 「この絵わたしはこう見る」 他		飯水遠隔ミニビブリオバトル		社会 他 (発展的な内容)					

★10月, 11月に 飯水遠隔ミニビブリオバトルを開催(飯山市+栄村の小学校8校を結んで)

3rd

- 自律的に学ぶことを楽しみ， P 3-1～
未知の世界と出会う
(信州大学学術研究院教育学系
教授 伏木久始氏)
- できないことをできるに， P 3-8～
マイナスをプラスに
(信州大学学術研究院教育学系
教授 村松浩幸氏)



栄小学校で行われている 5 年算数の授業を共有 ♪
① 上村小学校において栄小学校の授業を参観 ♪
② 三岳小学校において栄小学校の授業を参観 ♪
③ 栄小学校から授業内容に合わせて送られてくる児童や教員の様子（移動用カメラ） ♪
④ 栄小学校の黒板周辺の様子（固定カメラ） ♪

自律的に学ぶことを楽しみ,

未知の世界と出会う



この写真を撮った時… カメラのファインダーに映った3人の姿を見つめながら私はこう願ったのでした。…自分なりに学ぶことを楽しみ, 未知の世界との出会いにワクワクしてほしい… こうした思いは, 私が小・中・高校の教諭時代に出会えた子どもたちに対しても, 同じように考えるようになりました。そして今でも, 一人の教育学者として, 同じまなざして, 子ども一人一人をみつめるのです。

伏 木 久 始

信州大学 学術研究院(教育学系) 教授

大学院教育学研究科 高度教職実践専攻(教職大学院) 専攻長

■なぜ、新しい教育が求められているのか？

オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授らは、「今後10～20年程度で、(アメリカの総雇用者の)約47%の仕事が自動化されるリスクが高い」という推定結果を示し、ニューヨーク市立大学のキャシー・デビットソン教授は、「2011年度にアメリカの小学校に入学した子たちの65%は、大学卒業時に、今は存在していない職業に就くだろう。」と述べています。すでに企業や公共機関の受付の一部は自動音声やAIスピーカーに切り替えられ、お店の会計もセルフレジが増えてきました。未来社会はおそらく私たちの予測を超えたものになるでしょう。

こうした中、第5期科学技術基本計画(2016-2020)に合わせて、政府が未来社会の姿としてSociety 5.0という概念を提唱しました。人類の歴史は、狩猟社会(Society 1.0)、農耕社会(Society 2.0)、工業社会(Society 3.0)、情報社会(Society 4.0)と進化し、次世代のSociety 5.0は、「サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会」とされています。Society 5.0では、IoT(Internet of Things)で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すとされています。

人工知能(AI)により、ロボットや自動走行車などの技術革新も進みます。テクノロジーの進化により、トラック輸送に代わってドローン宅配が普及し、高齢者は通院しなくても自宅に居たまま遠隔でのオンライン診察を受けることができます。こうした新しい技術は、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題解決にも貢献すると考えられています。(伏木:2019)



▲ドローン宅配



▲遠隔オンライン診察

こうした現代社会の変化の中で、従来型の学校教育は、未来を生きる子どもたちが学ぶ環境としてフィットしない面が顕在化してきました。これまでは、ややもすると指示された通りに正確に仕事をこなし、学習者の意思とは無関係に決められた時間割を厳守して、集団に合わせて行動する人材を送り出してきたとも言えます。

これからの学校は、教育内容や授業方法を見直し、AIが不得意な領域の能力の伸張に焦点をあてた学習指導に着目することが求められますが、「新しい学び」を意図した研修がたくさん企画されるようになったのは、こうした社会的背景を踏まえてのことだと理解できます。

これまでの教育の何を受け継ぎ、どういう教育を新たに推進していくことが必要なのかあらためて考えてみましょう。

■社会の変化への対応の前に、 その子の「生き方を豊かにする教育」を優先する

めまぐるしい社会の変化に主体的に対応していける人材を育成するというかけ声をよく耳にします。国際社会の競争に生き残っていくためには、新たな知識や技術を生み出していく問題解決力や斬新な発想力が必要だ…などと説明されます。それらの言説には重要な意味があるし、学校教育の社会的使命としても、社会に期待される“人材”の育成には無頓着であってはならないだろうとも思います。

しかし、私はそれ以上に、学習者主体の教育を進めていくことを優先したいと考えています。国際社会が変化し、国や自治体が持続可能な社会を意図した新しい教育を求めるから、それに沿って新たな実践研究を目指すというような、国家の政治的要請や経済的事情に従属するのではなく、一人一人の子どもの生き方を豊かなものにするために、自分らしく学び続ける「個」を育てていくための“新たな学び”であることを第一に考えて、私は学校現場の先生方を支援しています。

マサチューセッツ工科大学のピーター・センゲ(2000)は、現状の学校を次のように指摘しました。

「学校というモデルは日常生活から切り離され、権威主義的様式によって支配され、何よりも標準化された製品を生むことを目指し、急速に拡大する産業化時代の仕事場に必要とされた労働力を供給する準備をした。
…(中略)…こうした制度は、基本的子どもたちを「できる子」と「できない子」という二つのカテゴリーに分けて扱う。組み立て作業ラインのスピードに合わせて学ばない生徒は脱落するか、あるいは追いつこうとずっと苦しみ続ける。この子たちは「スロー」、あるいは今日流行りの言葉で言うなら「学習困難児(LD)」というレッテルを貼られる。学校は生産物と生産工程を統一してノルマとして確立し、そこにはすべての子どもが同じ様式で学ぶという、子どもじみた仮定がある。その結果、教育者は管理者、監督者にさせられ、伝統的なメンターとメンティーという関係はなくなり、学習者中心の学習から教員中心の学習へと変わってしまった。動機づけを生むのは生徒自身ではなく、教員の責任になった。

センゲは、現状の学校教育が、規格化された機械の部品を製造していく工場のようなシステムで営まれていると捉え、学校教育の目的そのものを批判的に問い直すことを求めました。人が学び育つ場であるはずの学校が、学ぶ主体としての子どもを中心とした学び舎になっているのかどうかを点検することを提言したのです。

ところで、その子の生き方を豊かにする教育ってどういうことなのでしょう？私が子どもの頃に周囲の大人たちから受けていた教養は、「勉強して、“いい学校”へ進学して、“いい大学”へ入らないと、豊かな人生を送れない」というものでした。その“いい学校”、“いい大学”とは、いわゆる偏差値が高いという意味であって、自分の興味・関心とは別の尺度で判断され、そのでのカリキュラムや授業の質を話題にすることもありませんでした。

自分が大学で働くようになって確信したことは、偏差値による進路指導によって、入学試験で獲得する点数が近い生徒同士が同じ進学先で同窓生となるというシステムを維持することはできても、一人一人の受験生にとっての、自分なりの生き方を豊かにする保障はないということです。学歴を得るために努力した頑張りは、どこかで実を結ぶこともあるでしょう。でも、

決定的に重要なのは、自分なりに学ぼうとする意欲とそのために必要となる力です。そうした意欲や能力を高めるということは、カリキュラムを開発して学習指導をコントロールすることでは実現が難しく、自分なりの主体的な選択に基づく学習経験の蓄積によって身につけていくものであると思います。



ところが、いつの間にか日本の多くの学校では、その子なりの選択と試行錯誤やその子なりの発想を大切にする教育よりも、偏差値のより高い進学先に入学させることが目的化してしまい、ペーパーテストで正答を埋められるような学力が重視されるようになっていました。そういう学習訓練が就職後に生かされていた時代には、それなりの意味があったわけですが、今の子どもたちが社会に出る頃には、マニュアル通りの仕事や機械的な作業は、AIを搭載した機械が人間に代わる時代になります。

つまり、未来を生きる子どもたちの生き方を豊かにするために私たちにできることは、従来型の教育実践の知見を踏まえつつも、子どもの学習をめぐる環境を問い直し、教育者側の教育観を「学ぶ側の論理」に立って更新させていくことだと思います。例えば、自分なりの問いを学習課題に据えるとか、学習方法や学習スペースを自分で選択するとか、学習のまとめを自分なりに表現するという学習経験をたくさん積むことが望ましいでしょう。



そうした学習経験を通して、子どもが自分らしさを自覚し、自己肯定感を高め、他者との関わりを深めながら、自分の能力を精一杯発揮し、社会で活躍していくことができれば、きっと子どもの「生き方を豊かにできる」と言えるのだと思います。

■ 自律的に学ぶ学習者を育む

学校教育の役割として、その社会に必要とされる知識・技能を学習者に身につけさせ、家庭と連携して社会に適応していくためのソーシャルスキルをトレーニングし、一人一人の自己実現に貢献するような学習機会を提供するということは、時代を超えた“不易”の教育課題であり、国境を越えた万国共通の教育的使命です。そこで問われるべきことは、どんな知識・技能を要求するのか、それをどういう形で身につけることが適切だと考えるのか？というカリキュラムや教育方法の妥当性であり、それは、時代的・社会的要請や、学習者の自己実現のあり方を問い直す中で変化する“流行”の部分でもあります。それでは、何をどう考え直す必要があるのでしょうか？この問いに対して、教える側と学ぶ側という関係性を見直しから始める必要があると思っています。

かつては、熟達者としての教師が、未熟な存在とみなす子どもに、一方的に知識・技能を伝達するというシナリオで、授業が想定されていました。こうした伝達モデルを乗り越え、子どもが学ぶ内容や方法を自ら選択する自律学習モデルでは、教師



だと思います。ですから、学び手である子ども一人一人が、少しずつ自分の力で学び続ける学習経験(訓練)を積み上げていくことが必要なのです。

学ぶ側が、他人の指示・命令や与えられた規律(他律)・学習課題に従って学ぶだけではなく、状況に応じて、時には与えられた内容・方法を自分なりに変更してでも、自分なりに考えて学び続ける態度を、「自律的な学び」という言葉で説明しています。自己学習能力を育成することを目的に位置づけるのです。



の役割は大きく変わってくるのです。自ら目的や目標と方法を考え、見通し(仮説)をもって自分なりの規律に従い、自分のペースで問題解決に取り組み続けるスタイルは、全ての子どもが即座に適応できるわけではありません。それまで、設定されたルール上を脱線しないように歩むか、自分なりの判断が認められず“先生”の指示通りに取り組むという学びのルールに適応してきた子どもたちは、他律的に学ぶことに慣れ親しんでいるため、自律的に学ぶことを勧められても戸惑うのが当然

伝達モデルでは、教える側が常に“正解”をもち、状況に応じて教える側が適切だと考える方法をアドバイスし、学びの評価は教える側が決めた観点と規準に基づいて評価するという基本構造を前提としています。伝達モデルでは、教える側の教師が知らない領域へと子どもたちの学びが誘導されることはないし、教師が指導しうる学び方でしか追求できないという限界もあります。こうした学習指導をどれだけ繰り返しても、未知の状況に直面したときに、主体的に問題解決できる力は培われにくいと考えられます。ますます予想困難な未来社会に求められる知識・技能、能力や態度といったものを、学校教育において身につけようとする際には、伝達モデルから自律学習モデルへと移行していくことが望ましいと思います(伏木・峯村:2017)。

■ 中山間地域の小規模校を訪問し続けて思うこと



毎年多くの学校現場を訪問する中で、いつの間にか私は「過疎地・小規模校」の教育実践を優先的にサポートする講師になっていました。同時に、国際協同研究として、北欧諸国や南半球のニュージーランドの過疎地の学校現場へ訪問取材する機会も増えました。

例えば、ノルウェーの北極圏内の島に唯一の学校(小規模校)の授業や、ニュージーランドで最少人数の学校として紹介されたマウントクック中腹の小学校、フィンランドの中山間地域のへき地校には、この15年で本当にたくさんの学校を訪問しました。

それとは別に、オランダのイエナプラン校やモンテッソーリ校、スウェーデンのビットラ校など、敢えて 複式学級を採用して学習集団を形成している教育実践に学びました。教育制度も政治的・経済的背景も異なる学校なのに、小規模校の善さをフルに活かすための試行錯誤を続けている点は、どの学校も同じでした。参観した諸外国の学校では、社会性の育成を優先するという理由で、3つの学年を同居させていました。一斉画一型指導の授業は主流ではありませんでした。



訪問した学校の教師たちは、子どもは「教えたら学べない」と説明し「TeachingからLearningへ」というスローガンのもと、子どもの主体的・自律的な学習を丁寧に支援していました。

そして、一人一人の子どもの学びを継続的に診断し、どんなユニークな考え方をしているか、どこでつまづいているのかを、授業中にアセスメントしていました。

小規模校の授業で教師が「陥りがちな指導は、一人一人の子どもに先回りして指導してしまうことです。子どもの数が少なく手をかけやすいので、子どもが失敗する前にやり方を指導してしまったり、子どもがトライするための時間を与えないまま“正解”を教え込んでしまったりする「お節介」指導です。これでは、子どもの追究力を育むことは難しいというのが私の見方です。自己学習能力を育てることに逆行しています。

教室に30人も居れば個々の子どもの状況を把握しきれず、一人一人の学びをアセスメントすることは困難です。でも、少人数学級の指導者になると、一人一人の差異に目が届くため、つい善意で“教え”たくなるのは教師の性なのかも知れません。しかし、敢えて教え込まずにその子なりの試行錯誤を見守り、その子のわからなさ寄り添って、思考プロセスを共有してみるという、息の長い学習指導も必要です。そういう手立てが「個に応じた指導」の具体的な実践になっていくのであり、中山間地域の小規模校だからこそできる指導のひとつだと思います。

■ 非認知能力を育む“自律的な学び”の指導者になること

近年、教育分野で関心が高まっている「非認知能力」は、これまでのIQや学力などの認知能力よりも、子どもがその後、豊かな人生を送る上で、影響力がより大きいという研究報告から話題となった言葉です。「ひとつのことに粘り強く取り組む力 (grit)」や、「内発的動機に基づいて取り組もうとする意欲」などを非認知能力と言いますが、これを育むことと、自律的に学ぶこととは、強い相関があることがわかってきました。また、非認知能力の育成を阻害する最大の要因はストレスであり、教室内で問題行動をする級友がもたらすストレスよりも、厳格な規律で管理されることによるストレスの方が、影響は大きいという研究も提出されています。たとえ教育的配慮を根拠にしている、学び方を教師が全て決定し、先回りして逐一指導する教室では、教師の認識世界を超える学びが遮断されてしまい、教師からみた“ムダ”な寄り道はカットされてしまいます。それでは自律的な学びは成立しないし、非認知能力は失われることはあっても、育まれることはありません。私は多くの先生方に、自律的な学びの指導者になっていただきたいと思うのです。

子どもたちが教室で「自律的に学んでいる」と実感するのは、「自分で選択して自らの意志で取り組んでいる」という自覚をもっている時です。そのことが学習意欲を高め、自分なりに取り組めたことで自己肯定感も強まります。それにより、他者と繋がるエネルギーを得て、未知の世界へ飛び込んでいく勇氣と自信を得るのだと、私は考えています。

本事業では、栄村立栄小学校の宇佐美教諭と木曾町立三岳小学校の三沢教諭と飯田市立上村小学校の小林教諭の三人が、コーディネーター教員として精力的に実践を重ねてくださいました。三人ともこれまでの教員生活の中で積み上げてきた自分なりの授業スタイルとは別に、子どもの自律的な学び、異学年混合の学び、ICTを活用した遠隔学習など、「学びの改革」に即して果敢にトライされていた姿に、私もとても勇氣づけられました。ややもすると大学の研究室での理論を実践に適用させるだけのパターン学習になったり、教育委員会から先に結論ありきの予定調和的な実践報告になったりしがちですが、この事業は、長野県教育委員会の企画運営により、中山間地域リーディング校という指定校を核として、現場の先生方の実情に合わせつつも、新たな学びの創造をミッションとして、少しずつ理念を共有しつつ学び合った取り組みでした。また、コーディネーター教員が勤務校や連携校の管理職に支えられながら、同僚を巻き込んでの試行実践が行われたし、担当の指導主事と有識者も一緒になってまさに「ワン・チーム」として協働した意義のある実践研究でした。これからも私は、子どもの自律的な学びを指導する先生方のサポーターであり続けます。

自律的に学ぶことを楽しみ、未知の世界と出会うことで、生き方を豊かにする子どもたちのために…。

《引用・参考文献》

- ①ピーター・M・センゲ他(2000): Schools That Learn: A Fifth Discipline Fieldbook for Educators, Parents, and Everyone Who Cares About Education,; (リヒテルズ直子訳: 学習する学校—子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する, 英治出版, 2014)
- ②伏木久始・峯村均(2017): 山と湖の小さな町の大きな挑戦～信濃町の小中一貫教育の取り組み～, 学文社
- ③伏木久始(2019): 新学習指導要領が求める教育で問われる教師の教育観, 教育時評(学校教育研究所), No.49, pp.23-28
- ④伏木久始・宮島新(2020): 小規模校の条件を生かした新たな学びの開発事業における協働体制, 日本教育大学協会研究年報, 第38集,

伏木 久始 (ふせぎ ひさし)

1963年、栃木県生まれ。専門は教育方法学、教師教育学。博士(教育学)

信州大学 学術研究院(教育学系) 教授/教職大学院・専攻長

長野県教育委員会委員(教育長職務代理者)

東京都内で心理カウンセラーおよび中学校・高等学校の社会科教諭を務め、1997年に東京学芸大学大学院、連合学校教育学研究科(博士課程)に復学し、学位取得後、小学校教諭として総合学習の実践研究に打ち込む。



2003年に信州大学教育学部に転任し、2012年より現職。独立行政法人教職員支援機構の中央研修講師他、県内外の多くの学校現場の指導講師として実践研究をサポートしながら、北欧フィンランドやニュージーランドなど、海外の特色ある学校との協同研究を行う。中央教育審議会・教員養成部会専門委員ほか文部科学省委員を兼任。

チームプロジェクト成果発表会



「2050年、人類は火星に進出をした。火星の学校生活で起こるトラブルを想定し、火星での学校生活を快適にするシステム開発しよう!」というお題に対し、異なる地域、学校、学年の4名が1チームになり課題に取り組みました。ここではその成果の一部をご紹介します。

MARS COMFORT PROJECT!

火星での学校生活を快適にするシステムを開発しよう!

チーム: off White: 7「楽しく火星で運動」

火星学校のつらい筋肉トレーニングを楽しくするというシステムを開発しました。



チーム: Go to Mars「火星の掃除は大変だ」

砂漠で掃除が大変になると考え、「砂がたまらない学校」を作ろうと考えました。



チーム: Core i9「火星人と人類共通Chair」

火星人と人類が同じ学校に通うとしたら、椅子も共用にしなければいけない。ボタンを押すことで火星用と人間用を切り替える椅子を開発しました。



2019年度信州大学ジュニアドクター育成塾チーム発表会より
—技術を活用し、まだ見ぬ未来を創り出す—

小5から中3までの異なる学校の子どもたちが、協同で「火星での学校生活を快適にするシステム」を開発

できないことをできるに、

マイナスをプラスに、

—技術で拓く新しい学び—

村松 浩幸

信州大学学術研究院教育学系教授

附属次世代型学び研究開発センター長

■できないことをできるようにするのが技術の役目

本稿では、中山間地域発「新たな学び」の中でも、遠隔合同の学び、言い換えるならば ICT を活用した学びについて述べます。ICT や技術を活用した学びというと、現在GIGAスクールで1人1台端末導入など、どんどん推進していこうというのが、国全体の流れです。その一方で、教室へのICTの導入や授業での活用に対して否定的、あるいは極端に言えば嫌悪感を持たれている先生もまだ少なからずおられるのではないのでしょうか。筆者はICTの活用自体はもちろん肯定的な立場ですが、決してまず先にICTありきとは考えていません。言うまでもなく、ICTは子どもたちの学びを促進するためにあります。そしてICT=技術を活用することは、技術によって、人がそれまでにできないことをできるようにする、マイナスだったことをプラスに変えるためにあると考えています。

例えば、眼鏡を考えてみましょう。私自身も眼鏡を外したら何も見えず、大変です。朝起きて、眼鏡が見つからず手探りで探すことも時々あります。眼鏡という技術がなかった時代であれば、私は日常生活にも困難を来していたでしょう。縄文時代やそれ以前であれば、狩りもできず、生きることすら困難だったかもしれません。眼鏡によって、目が悪いというマイナスが打ち消され、できることが増えたのです。眼鏡という人間が生み出した技術には深く感謝しなければなりません。

同様に、それまでにできないことをできるようにする技術が教室にはあります。室内を明るくする蛍光灯などもそうですし、学校という形ができた明治の頃からある黒板もその一つです。黒板は、明治初年に東京高等師範学校（の前身）でアメリカ教師により紹介され、広まっていったそうです。そのアメリカでも、黒板自体はフランスから伝えられたとのこと。フランスでは1800年の始めに高等理工科学校での画法幾何学の教授に黒板が活用されたことに始まったそうです。画法幾何学という、言葉だけでは伝えきれない内容を学ばせたいとの願いから黒板の活用は始まりました。

教室には、紙や石板しかなかったものが、黒板という新しい技術の登場により、文字のみならず、図までもが教室内に同時に情報共有され、効率的に教授できるようになりました。当時としては画期的な技術と教育効果だったことでしょう。そして現代のインターネットやテレビ会議システムのように、黒板が、当時の人たちにとってそれまでにない新しい学びを拓くツールとなり、世界中の教室に広まっていきました。

黒板の登場から200年近く経ちました。100年後の未来の学校では、黒板がそうであったように、ICTや遠隔学習の技術も、その登場により、子どもたちに新しい学びが拓かれていったと評価されるような実践を進めたいと考えます。

一方、2020年度より小学校段階でプログラミング教育が必修化されます。小学校でのプログラミング教育の目的は、既に多くの方がご存じのように、子どもたちがプログラミング言語自体を習得することではなく、プログラミングの体験を通し、プログラムの働きや良さなど情報技術の社会における役割を知り、その技術の考え方を身につけて問題解決に役立てるようにすることです。言い換えるならば、ICT活用だけでなく、プログラムという技術そのものを学び、そしてそれを使って問題解決に取り組むことです。今までのICT活用から、さらにもう一步踏み込んで、子どもたちが技術そのものを学び活用していく段階に来ているといえるでしょう。



明治7年の黒板と掲示物（旧開智小学校）

■ 技術を活用した中山間地域での新しい学び

「できないことをできるようにする」という点で、中山間地域発「新たな学び」の中で展開されたICTによる遠隔合同の学びやプログラミング教育での学びは、まさにそのような実践であったと考えます。

上村小学校では、複数のプログラミングの授業に挑戦されました。プログラミングを通して、最初から最後まで主体的に学習に取り組んでいる子どもの姿が報告されています。プログラムという技術を使った活動が、これまでの理科では見られなかったような、子どもたちの意欲的、主体的な学びを引き出しています。また、全国へき地教育研究大会においては、上村小学校と信州大学との遠隔のプログラミングの授業も行われ、子どもたちが意欲的にロボットのプログラミングに取り組む授業が距離を超えて展開されました。先に述べたように、これまでの教具的なICTの活用からさらに一歩踏み込んで子どもたち自身が技術を学び、主体的に取り組んでいました。

理科の授業の中での子どもの言葉として報告された、「自分がやりたいことができる。友達との協力ができるようになった」ことは、とても大切なことだと思います。これまでも調べ学習や学習のまとめ、記録などにもタブレット等、ICT機器が活用されていたかと思いますが、プログラミングへの取組が、子どもたちにまた新しい学びを拓いてくれました。こうした姿は、プログラミング教育に取り組むいろいろな学校でも見ることができます。

例えば中学年の子どもたちが、通常なら中学校で習うようなマイナスの数やX座標、Y座標といった座標系などをプログラミングの中で使って作品を作っていく姿もよく見ます。算数の体系からしたら驚くべきことですが、子どもたちは数学を使っているという意識はなく、願う作品を作りたいから様々に考え、作るために必要だから自ら学び使えるようになっているのです。こうした取組は、時に先生方を超えていきます。技術より何よりも、子どもが先生を簡単に超えていくような教育内容は、これまでの学校教育の中にはなかったのではないのでしょうか。

三岳小学校でもICTを活用した実践が展開されていました。例えば、王滝小学校との遠隔合同で児童会祭や児童会選挙を実施しています。これも従来であれば、行き来するだけで大変な手間や時間がかかったことが、技術の活用によって実現されている良い事例ではないのでしょうか。また、三岳小学校も昨年は、王滝小学校と合同でのプログラミングを用いたオリジナルの楽器作りの授業に取り組んでいます。異なる学校の子どもたちが、プログラミング+ものづくりを通してあっという間に仲良くなり、異学年で協力し合い、アイデアを形にしていた姿も印象的でした。協同して新たな価値を生み出すことは、これからの子どもたちにとって、とても大事な資質・能力になります。



上村小学校での遠隔プログラミング授業

3校の実践の中でも特筆すべきが、栄小学校を中心とした実践です。栄小学校では、日常的に分校と遠隔授業を実施されていますが、さらにそこから発展し、地域の学校も巻き込んで、遠隔ミニビブリオバトル（書評合戦）を展開されました。実践記録にあるように、最終的には、飯水地区の小学校8校で展開、さらには上村小学校も参加するなど、多くの学校を巻き込んでの実践を展開されていました。記録の動画ファイルを拝見しましたが、多くの学校の子どもたちが書評合戦に挑む姿は、とても生き生きしていました。チャンプ本アナウンスの緊張の瞬間。チャンプ本に選ばれた子やその友達らの盛り上がり。堂々とした進行役の子どもの姿。そして次々とリレーされる各校でのお別れの挨拶など、リアルタイムに参加していなかった私もそこに参加しているような、そんな気持ちにさせられました。



このように、中山間地のリーディング校の先生方によって行われた遠隔合同学習の実践が、事業にもある「中山間地域発」のタイトル通り、中山間地の学校から地域へと発信され、地域全体が遠隔合同の実践に距離を超えて取り組んだことは、大変素晴らしいことだと思います。このように、この事業での実践や成果が、決してその実践校の中だけに留まることなく、周辺、そしていずれは全県へと波及していくことが、まさにこの事業の目指すべきゴールではないかと考えます。これは、2年目になった中山間地域発「新たな学び」事業の大きな成果ではないでしょうか。学級数も児童・生徒数も減少し、縮小のスパイラルに悩む各地にとって、小さいからこそ機動的に動くことができ、小さいからこそトライ＆エラーも簡単で、どんどん実践を改良していける等、小さいことをデメリットでなく、メリットに変えることで新しい学びを拓いていく。ICTを活用した遠隔学習はそうした取組に大きく貢献してくれています。



三岳小学校での合同プログラミング授業

また、前年度になりますが、栄小学校、上村小学校とは、遠隔によるプログラミングの教員研修会も実施させていただきました。私自身は学部のある長野キャンパスにしながら、午後の隙間時間で各校の先生方と一緒に演習に取り組むことができました。特に、栄小学校での研修は1月でしたので、カメラを通して見せていただいた学校の周りはm単位の雪景色でした。通常ならお伺いするだけでも一苦勞です。でも遠隔のお陰で先生方とつながることができました。もちろん、その場で実際にできるに越したことはありません。しかし通常なら行けない日程や時期でも、やれるようになったことは格段に大きいのではないのでしょうか。長野県にとっても、遠隔での



栄小学校での遠隔プログラミング研修

教員研修は、子どもの学びと共に重要なテーマになってくるのでしょう。それにつながる貴重な実践を試みさせていただきました。

■60年前の技術が拓いた新たな学び

技術と子どもたちの学びに関わって、1953年と、60年も前の山の分校での実践の記録があります。当時のNHK教育テレビで放送された番組で、栃木県の山奥の集落にある分校での実践です。この学校は、1年生から3年生までと4年生から6年生までの複式学級2組しかなく、教育環境も貧弱で、黒板とチョークと机と教科書があるだけだったとのこと。

この環境の中に赴任してきた先生は、どうしたら子どもたちをうまく指導できるかと様々な努力を重ねられたそうです。その中で、子どもたちと都会の学校に3日間の留学をしたそうです。初めての都会の学校で子どもたちは様々な驚きの体験をします。その中でも子どもたちに特に衝撃を与えたのが、当時始まったばかりのテレビの教育番組を見る授業だったとのこと。その先生は、自分の学校に戻った子どもたちの「テレビを見たい」という熱意に押され、いろいろ掛け合いNHKからテレビを借りることができたのです。

いよいよテレビがやってきました。17インチの小さな白黒テレビの小さなフレームの中には、彼らがまだ一度も見たことない世界が飛び込んできました。最初は音楽の教育番組だったそうです。バイオリンやビオラ、チェロと、以前はただぼんやり想像するばかりだったその楽器と響くような音が聞こえてくることに、子どもたちは画面に吸い付けられ、離れませんでした。テレビに映る世界は大人でさえ驚くことばかりでした。

そしてテレビを見るだけでなく、テレビの視聴によって子どもたちの学びに変化が見えてきたそうです。ある子どもが何か家で一生懸命船を作っていました。それは木で作った船で、テレビで船の作り方を見たことで、自分でも作りたくなったというのです。慣れない手つきで鑿(たがね)を扱う子どもを見て父親が使い方をアドバイスし、完成させた船を学校に持っていきました。生まれてまだ本物の船を見たことがなかった子どもたちは驚き、他の子どもたちも船を作り出したそうです。その他にもテレビ番組の視聴をきっかけに様々な学びが展開され、村のことを調べる調べ学習へと発展していきました。現在のPBLや総合的な学習の時間の原点的なものでもあります。その成果を発表する発表会では、子どもたちはテレビ番組風に村の人たちの前で発表しました。

発表は、子どもたちが自分たちの集落の生活を調べ、理解するだけでなく、さらに集落全体が将来の発展に向けてどうすれば良いのかを提案するという、堂々としたものだったそうです。子どもたちは様々な提案をしました。

「ここでは主に炭焼きばかりしていますが、炭焼きは危険が多い割に利益が少ないとすれば、何か他の仕事を考えなければなりません。ダイコンはこの地方でも大変よく採れますから、畑は少ないが収穫は多いのではないのでしょうか。また、川の水は冷たくきれいで、一年中水の温度が変わらないことから、マスの養殖場なども作ったらどうだろうと家のおじいさんは色々調べています。その他、この土地は、わさび、なめこ、椎茸などの栽培に適していることが、先生と一緒に調べて分かりました。」

こうした子どもたちの発表に、日々の生活に追われていた保護者は、ある親は泣き、ある親は驚き、ある親は恥じ、改めて自分たちの生活を振り返ったとのこと。この番組が放映された当時、全国から大きな反響があったそうです。

この60年前の実践では、パソコンもインターネットもありません。でも、テレビという当時最先端の技術によって、子どもたち、そして地域に新しい世界が拓かれ、新しい学びが展開されていきました。今から見れば、ノートパソコンのディスプレイ程度の大きさで、白黒だし、不鮮明な画面ではありますが。でもそのテレビという技術により、子どもたちが新しい学びに出会うことができたのです。200年前の黒板の登場から、テレビという技術により、新たな学びが拓かれていったわけです。今回の事業では、インターネット、テレビ会議というICTの活用で、60年前ではもちろんできなかった、あるいは手間と時間が大変かかった、距離を超えた協同の学びが各校で展開され、さらにはプログラムという技術そのものも学ぶことで、これまでとまた違った学びも展開されています。同時に、これらの実践が決して無理することなく、各校で展開されていた点も注目すべき点であると考えます。今回の事業を通して、時代が新しい段階に入ってきたことを感じました。

■技術が拓く新しい学びを子どもたちに

現在、「GIGAスクール構想の実現」に向けた児童生徒1人1台端末の整備事業が展開されようとしています。ここで目指されるのは「多様な子どもたちを『誰一人取り残すことない、公正に個別最適化された学び』の実現」です。教育現場でICT環境を基盤とした先端技術等を活用することの意義について、文部科学省は、子どもたちの学びに関わって「学びにおける時間・距離などの制約を取り払う」「個別に最適で効果的な学びの支援」「学びの知見の共有や生成」としています。このどれもが、中山間地域発「新たな学び」につながっています。そして少人数ゆえに、端末の整備や活用も、取り組もうと思えば大規模校や大規模な自治体よりも実現しやすいでしょう。それが実現していけば、小規模校がその規模の小ささをメリットに変えて、先端をいく学びを実現していくことも可能でしょう。今回の事業はその実証の第一歩であったと思います。

社会では端末もさることながら、AI技術の活用も本格化し、より高速で大容量の通信ができる5G技術も広まりだしてきました。こうした技術を恐れることなく、積極的に取り入れ、子どもたちの新しい学びに活用していただきたいと思います。そしてそこを支援するのが、私たち大学側の社会的役割であると考えています。

今年度の事業を踏まえたときの次の課題は、ここでの成果を、これからどのように県内に広め、中山間地のみならず、新しい学びとして展開できるかであると考えます。その波及、普及には技術がまた、強力なツールとして役立つことでしょう。

明日の未来を創っていく子どもたちのためにも、学校現場、教育行政、大学それぞれが手を取り合い、協力し合い、できないことをできるに、マイナスをプラスに変えて子どもたちに新しい学びを拓いていきましょう。

村松 浩幸(むらまつ ひろゆき)

1964年長野県生まれ。信州大学学術研究院教育学系教授・附属次世代型学び研究開発センター長。博士(学校教育学)、長野県の中学校技術科教諭として県内にロボコンを広め、三重大学を経て2008年より現職。専門は技術教育学で、様々な教材開発を行っている。県内外の学校現場で活躍している卒業生も多数。主な著書に「技術科教育(一藝社)」、「知財教育の実践と理論(白桃書房)」等。2015年度の科学技術分野の文部科学大臣表彰等、複数の表彰。NHK高専ロボコンの審査委員長や日本産業技術教育学会会長も務める。



《参考文献》

- ①小倉金之助、黒板はどこから来たのか、『別冊文芸春秋』昭和22年10月号、1947年
- ②NHKアーカイブス2「山の分校の記録ー子どもたちの目が輝いていた時代ー」双葉社、2004年
※ NHKアーカイブス(URL <https://www.nhk.or.jp/archives/>)で「山の分校の記録」で検索すると、この番組で子どもたちが初めてテレビを見たときの様子など一部だけですが、視聴することができます。
- ③文部科学省、新時代の学びを支える最先端技術活用推進方策(最終まとめ)、2019年

4th

□ 全国へき地教育研究大会
長野大会
・10校の実践報告より
事例①～⑫



事例		学校名	研究主題
① ③	A	野沢温泉村立 野沢温泉小学校	ゆたかな学びを創造する子どもと教師 ～ひと・もの・ことに主体的に働きかけながら、 学び合う学園～
② ③	B	野沢温泉村立 野沢温泉中学校	ゆたかな学びを創造する子どもと教師 ～ひと・もの・ことに主体的に働きかけながら、 学び合う学園～
④	C	長野市立 鬼無里小学校・中学校	かかわりから自己の学び・生き方を決める ～鬼無里で学ぶ 鬼無里に学ぶ～
⑤	D	大町市立 美麻小中学校	協働の学びの質を高める ～9年間の学びによる自律した学習者の育成～
⑥	E	塩尻市辰野町中学校組合立 両小野中学校	ふるさと「たのめの里」を知り、共に愛し、 「たのめの里」に貢献できる生徒の育成
⑦	F	辰野町塩尻市小学校組合立 両小野小学校	ふるさと「たのめの里」に生き、地域と共に 伸びゆく子どもの育成
⑧ ⑨	G	北相木村立 北相木小学校	自然や人と主体的にかかわり、学ぶ喜びを 感じ合える子どもの育成
⑩	H	南牧村立 南牧中学校	自分の考えをもち、高め合う生徒の育成 ～豊かな表現の学びを目指して～
⑪	I	伊那市立 新山小学校	人との関わりを広げたり深めたりする力を 育む指導・支援のあり方
⑫	J	飯田市立 上村小学校	豊かな見方・考え方をもち、学び合い高め合 う子どもを育成する指導・支援はどうあった らよいか

全国へき地教育研究大会長野大会 事例①

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

6 年

Where's Spot?のお話を作って 1 年生に読み聞かせよう

野沢温泉村立

野沢温泉小学校

実践スタイル

異学年との交流を目指し、相手意識をもって活動を工夫する取り組み

本時のねらい

Today's Goal:お互いに見合ったり、動画を見直したりして、1 年生に楽しんでもらえるように、絵本の読み方を工夫しよう。

Today's Point: ・大事な言葉をはっきり ・相手の顔を見ながら（わからなかったら繰り返す）

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

①英語の絵本 *Where's Spot?*

②タブレット端末（録画用）

ねらい

①繰り返しの表現からストーリーが理解しやすい。作成する絵本のモデルとする。

②録画した自分たちの読み方を、客観的に振り返り、改善点を見つける。

学習者のユニットとその意図

6 学年では、異学年の 1 年生に自作の英語絵本を読み聞かせることを単元の目標とし、「1 年生に伝えるように」「1 年生が楽しめるように」という、目的や相手意識を大切に外国語活動に取り組んだ。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
- 絵本や英語の表現と出会う - 表現に慣れ親しむ 1 年生を意識して内容や伝え方を工夫する - 実際に発表をする	前置詞の意味や言い方を知り、ゲームなどを通じて慣れ親しむ。	・自立した個の学び	1 ～ 2
	<i>Where's Spot?</i> のお話を聞いて、内容や面白さを理解し、動物や場所をアレンジした絵本を作る。	(異学年を意識して)	3 ～ 6
	読み聞かせの練習や工夫をする。	(異学年を意識して)	7 ～ 9
	1 年生に読み聞かせをする。	・異学年合同の学び	10



写真1：自分たちで作った絵本の読み聞かせ方について、グループで話し合う児童



写真2：互いのグループの読み聞かせを聞き合い、読み方について助言し合う児童



写真3：単元の終末で、工夫してきた読み方で1年生に読み聞かせをしている児童

児童生徒の学び（異学年合同の学びによせて）

野沢温泉学園の「英語学習」（こども園の「英語あそび」、小学校の「外国語活動」、中学校の「外国語」の総称）では、幼保小中一貫のカリキュラムがあり、異校種や異学年の子どもたちが合同で学ぶ機会が年間計画に位置付いている。子どもたちは、年間数回、異校種や異学年の子どもとの英語を使った活動に取り組んでいる。

今回の6年生の授業では、単元の終末に「1年生に自作の英語絵本を読み聞かせること」を Lesson Goal として設定した。ALT の読み聞かせをモデルとして提示すると、ALT と同じように自分たちが1年生へ読み聞かせてみたい気持ちや、1年生に絵本を楽しんでほしい気持ちが6年生の中で高まった。

本時ではまず Today's Goal を「1年生に楽しんでもらえるように、読み方を工夫しよう」と設定し、そのためのポイントを出し合った。「話が分からなかったらつまらないよね」「なるべく簡単な英語にしよう」「聞こえないといけないから大きな声でやろう」「反応を見てわからなそうだったらもう一回ゆっくり言う」などの児童の発言をもとに、Today's Point として「大事な言葉をはっきり」「相手の顔を見て」が共有された。

グループで意見交換（写真1）では、実際にやってみながら、ヒントの出し方や、絵を隠してある紙のまくり方などについての練習が主になり、まだ「読み方」の工夫には至っていない姿が多かった。

互いのグループを見てアドバイスをし合う場面（写真2）では、見ていたグループから「絵本のほうがかり見ているよ」「タコの足のところは何て言ってたの？」など、Today's Point に沿った意見が出された。意見をもらったグループは、「脚の数が伝わらなかった。eight はゆっくりはっきり言おう。本番は1年生に聞いてもらおうだし。」「やっぱり顔を見ていないと、伝わったかどうかかわからないね」と他のグループからの意見をもとに「読み方」の工夫を具体的にしていく姿が見られた。

授業のねらいを明確にするため、Today's Goal と Today's Point が設定されても、それらが本当に子どもの課題（問い）となるには、やはり実際に英語を使って他者とやり取りをすることが必要である。上記の姿のように、多くの児童は、他のグループからのアドバイスを受けて、初めて「相手」に意識が向き、1年生に楽しんでもらうには、どう読めばいいか、と追究が始まったと考えられる。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	Today's Point を観点として、Today's Goal が達成されたか評価する。
具体的変容	Today's Point 「大事な言葉をはっきり」に沿ったアドバイスを受け、「1年生に楽しんでもらえるように」という Today's Goal の達成のため、タコの足の数「three をはっきりゆっくり読もう」と、「読み方」の工夫をする姿が見られた。

実践の手応え（エビデンス）

公開授業の翌週、実際に1年生への読み聞かせを行った場面（写真3）では、6年生が1年生をやさしく思いやりながら絵本の読み聞かせている姿が見られた。何度も練習を繰り返した6年生は、英文はすでにスラスラ言えるようになっているが、早口で一方向的に発表するようなことはなく、しっかりと1年生の笑顔を見て、反応を確認しながら読み聞かせていた。1年生の表情が曇ったときは、ゆっくり、数や場所、動物の名前などを繰り返したり、ジェスチャーで伝えようとしたりしながら、相手に応じた読み方の工夫をすることができた。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例②

中学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
3 年	ふるさと野沢温泉村の未来		野沢温泉村立 野沢温泉中学校

実践スタイル 村議会議員の方々に来ていただき、村への提案をよりよいものにしよう

本時のねらい

観光、福祉、防災、生活、農業、自然の6つの観点から、野沢温泉村をより良くするための手段を提案する場面で、村議会議員の方々に自分のアイデアを発表し検討することを通して、提案に根拠をもたせるための今後の調査活動について見通しをもつことができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

プロジェクター、PC、これまでまとめてきた提案のプレゼンテーション
村議会議員4名

ねらい

観光、福祉、防災、生活、農業、自然について、村の課題を伺ってきた村議会議員の方々に来ていただき、自分たちのアイデアを分かりやすく提案できるようにする。

学習者のユニットとその意図

観光、福祉、防災、生活、農業、自然の6つの観点について村の課題を伺いながら、3～4名のグループで、村の課題を共有しながら調査を行うようにした。文化祭でもプレゼンテーションで自分たちの考えを提案し、それを村議会議員の方々にも聞いていただくことにした。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
村の課題について、自分たちのアイデアを提案していこう	議会で議論されている内容や行われている事業を、村議会議員に直接、教えていただく。	地域の方との学び	4
	村の課題について調べたいテーマを絞り込み、役場や村内でのインタビューや調査活動を行う。	地域の方との学び	12
	調査活動をプレゼンテーションにまとめ、文化祭で発表する。	自律した個の学び	4
	再び村議会議員の方々に来ていただき6つの課題に対する提案を発表する。	地域の方との学び	2
	提案を裏付ける内容や根拠を確かにするため、調査等を行う。	自律した個の学び	10



写真1：税収を増やすために、山頂に「テラス」を作ること、「星空ツアー」の実施を提案。



写真2：提案に対して税の収支の説明と、提案に対して参考にしたい、と返答した議員。



写真3：質疑応答や意見交換が続いた後、今後の調査活動の見通しを語る生徒。

児童生徒の学び（地域の型との学びによせて）

本時の1時間では、「観光」「福祉」「生活」の3グループに絞り込んで議員の方に提案を行った。

まず「観光」グループは、村の税収である「自主財源」が3割程度と低いことに着目し、村の現在の財産を活用した「財産収入→夏のスキー場の収入を増やす」アイデアを2つ提案した。1つ目が頂上付近の「上ノ平」に飲食や滞在が可能な「テラス」を作ること、2つ目がそれをさらに活用した「星空ツアー」を実施することである。

議員の方からは税収入や支出の現状、思い切って新しいゴンドラを設置することにしたこととお話いただき、教師はグループを問わず質問がないか生徒に聞いた。すると「テラスを作るスペースはあるか？」と質問が出て、議員からは「ゴンドラ到着駅付近、今はテレビ塔があるところに、村長は360°見渡せるテラスを作りたいと考えているようだ」。さらに生徒から「夏の期間の利用となると、宣伝も必要だと思うが何か考えているか？」と質問が出て、議員からは「竹の子まつりなど、新しいイベントも増えている。他にもいろいろなアイデアがあったら、提案してほしい」とお話をいただいた。

他にも「福祉」グループは、資金調達のための「クラウド・ファンディング」を行うこと、「生活」グループは、村の若者住宅への入居希望が3倍以上の希望があり、希望しても住むことができない人がいることについて、「空き家のリフォームに補助を出す」ことなどを提案した。

議員の方々からは、議員の高齢化問題にも触れ、若い中学生がこうした課題などに関心をもち、新鮮なアイデアを提案してもらうことはありがたいので、これからも続けてほしい、とお話をいただいた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	自分たちが考えた村の課題への提案について、現状を踏まえて議員と意見交換をする中で、より具体的なアイデアとして練り上げることができたか。
具体的変容	現状を熟知している議員との意見交換の中で、実現するための場所、資金、財産などの現状を確認し、今後の調査活動への見通しと意欲を高めることができた。

実践の手応え（エビデンス）

議員と何度か意見交換したり、提案ができたりしたことは、議員にとっても新たな視点から課題の克服を考えることにもなり、中学生も村に対して自分にできそうなことを主体的に考える意欲を高めることができることにつながったと考えられる。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例③

小中学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
小1と小2，年少と小3 小4～小6と中1～中3	異学年合同授業，交流活動 R1第2回小中合同集会		野沢温泉村立 野沢温泉小中学校

実践スタイル 異学年との交流活動（ワークショップ，話し合いなど）

本時のねらい

交流活動を通して，児童，生徒が野沢温泉学園の一員であることを改めて認識し，一つの活動や一つのテーマについて話し合うことで，学園内の子どものつながりを高め，絆を深める。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

「リトミック」小1・2合同 「オリジナル夏祭り」小3，年少合同
「小中合同集会（ペーパータワー，学園3本柱づくり）」小4～6，中1～3

ねらい

発達段階に沿った共通の活動を仕組むことで，楽しみながら自然に交流を行い，互いの顔を知ったり，価値観を共有したりすることができる。

学習者のユニットとその意図

小1・2年は，「リトミック」（活動的な音楽教育）を行うことで，好き嫌いや性別，固定的な人間関係とは異なるグループを作成し，主体的に関わる姿勢を培う。

小3は小6になった時に小1として入学してくる「年少」との交流活動を行うことで，「小1ギャップ」の克服をねらいながら，リーダーとして成長していく意欲を培う。

小4～6年は児童会を中心に，中1～中3年は生徒会を中心に活動を行い，異学年との関わりの中で自分のあり方を考え，関わり，行動しようとする姿勢を育む。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
リトミックを楽しもう 小1，小2	音楽や歌でダンスや表現活動を行い，より多くの生徒と関わる。	異学年合同の学び	1
オリジナル夏祭り 小3，年少	小3が用意した「射的ゲーム」「魚釣り」などで楽しく交流する。	異学年合同の学び	1
小中合同集会で「学園三本柱」を考えよう	第1回小中合同集会で，今年の「学園スローガン」を具現化するための「学園三本柱」作成の提案。	異学年合同の学び	1
	第2回小中合同集会で，交流活動をしながら，「学園として大切にしたいこと」を考える。	異学年合同の学び	1
	第3回小中合同集会で，交流しながら「学園三本柱」を決め出す。	異学年合同の学び	1



写真1：小1，2年「リトミック」を楽しみながら，多くの児童と関わる姿。



写真2：小3がリーダーとなって，年少と楽しみながら，ゲームをして交流する姿。



写真3：小4～小6の小中合同集会で，児童会主催でペーパータワーをして交流する姿。

児童生徒の学び（異学年合同の学びによせて）

小4～6年，中1～3年の「小中合同集会」では，最初に小学校の児童会が中心となって，「ペーパータワー」の活動が行われた。異学年による縦割りグループを作っておき，児童会役員から「紙を折ってもいいが，切ることや接着はしてはいけない」「時間内に，一番高いタワーを作ることができた班が勝ち」などの説明をし，活動に入った。最初は中学生がリードすることが多く，「こう折って積んだら…」と提案することが多かったが，小学生もだんだんと慣れてくると自分のアイディアを提案する姿が見られるようになっていった。

次に中学校の生徒会が中心となって同じグループによって，「学園三本柱」の作成に向けて「学園として私たちが大切にしたいこと」を話し合った。事前にアンケートを配っておき，最初は自分の考えを付箋に書いて模造紙に貼りながら，「ペーパータワー」を行った班の中で発表し合った。その後「学園三本柱」を，こども園の園児にも分かる言葉で考えよう，と生徒会役員から提案があり，班ごとに話し合った。中学生が「知性」と提案すると，小学4年生からは「知性ってなーに？」と素直な反応があり，「勉強のことだよ」と中学生が分かりやすく教えようとする姿が見られた。

交流活動を通して，リードをするリーダーの姿から後輩が学ぶこともあったが，後輩がリーダーの気付かない視点からの指摘をすることもあり，先輩が相手意識をもつことの大切さも学んだり，結果として自分の物事に対する見方や考え方を見つめ直したりする姿も見ることができた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	交流集会や合同集会を通して，普段の学年の枠や関係性などを超えて，より多くの友と主体的に活動に取り組みながら，新たな発想や新たな視点をもつことができたか。
具体的変容	他者の視点で考えることや他者との関わりを行う中で，単に上級生が下級生をリードするだけではなく，自分の見方や考え方を改めて見つめ直す姿も見られた。

実践の手応え（エビデンス）

2時間目は普段の活動の延長として，3つのユニットで活動を行った。こども園から小学校低学年までは，楽しみながら活動したり関わりを増やしたりすることが大切であるが，小学校高学年から中学校は，広い発達段階で共有できる課題設定を教師が適切にすることで，活動を充実させることができ，さらに個々の学びにつながると考えられる。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例④

中学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

全校

ふるさと鬼無里の未来を想う 第二章

長野市立

鬼無里中学校

実践スタイル

全校で、地域の大人と共に鬼無里活性化プロジェクトを動かす。

本時のねらい

「旅の駅でのイベント企画」を提案し、内容を練り上げていく場面で、「活性化への貢献」「観光客の立場」「自分たちの学び」の観点から、地域の大人と話し合うことを通して、目的や意義を再確認し、「ふるさと鬼無里の将来」にも思いを寄せながらイベントや活性化への意欲を高めることができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

「人材」として、「旅の駅」に関係する地域の大人、長野市役所鬼無里支所長、昨年度からかかわりのある埼玉県在住の大人。

ねらい

大人の見方・考え方、生き様にふれることを通して、生徒が自分の見方・考え方を広げたり深めたりすることができるようにする。

学習者のユニットとその意図

中学生が考えた企画を提案し、地域の大人から意見や助言をいただきながら、企画内容を練り上げていく。途中で、「大人も『旅の駅』を将来的に鬼無里の中心にしたいと考えている」「『旅の駅』を『道の駅』にして、より充実させたいと思っている」という大人の思いが吐露され、それを聞いた生徒たちが、目先のイベントだけではなく、「ふるさと鬼無里の将来像」にまで目を向けていく姿をねらう。また、「中学生も大人も『旅の駅』に注目し、期待を寄せている」という「共通する思い」や「地域の大人とのつながり」に気づき、イベントや活性化への意欲をさらに高めていく姿も目指す。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び	授業時数
「ふるさと鬼無里の未来を想う 第二章」 ・企画内容の検討 ・企画書の作成 ・大人への提案 ・企画内容の練り上げ ・イベントの準備 ・イベント本番	総務・スタンプラリー・ふるまい&体験コーナーの3つの係に分かれ、企画内容を決めだしていく。	・異学年でのかかわりを通した学び	3時間
	企画書を作成し、全体で検討した後、「旅の駅」に関わる地域の大人に提案する。大人から意見や助言をいただき、練り上げる。	・異学年の友や地域の大人とのかかわりを通した学び	2時間
	友と協働してイベントの準備をする。	・異学年でのかかわりを通した学び	6時間
	当日、大人の協力を得ながら、県内外の観光客に向けてPRしたり、インタビューしたりする。	・異学年の友や地域の大人とのかかわりを通した学び	1日



写真1：伊藤さんの話に真剣な表情で耳を傾け、助言をメモするSさん。



写真2：話の流れを踏まえて、自分から質問するSさん。



写真3：自分が獲得した学びを発表するSさん。

生徒の学び

総務係のSさんは、イベントの全体を見渡ししながら、一人一人の動線を考えたり、散策マップの手渡し方（質問内容やPRポイント等）を友と検討したりしてきた。前時を終えた日の生活記録には、「金曜日の話し合いが楽しみです」と綴っていた。本時、Sさんは、企画書を何度も見直ししながら、話を聞くことや助言をメモすることに終始していたが、途中で手を挙げ、「どのくらいのお客さんが来るのですか」と質問した。このSさんの質問がきっかけになって、伊藤さんや久保田さんが次々と意見を述べていった。その中で小野さんからの、「白馬へ抜ける道として通過する人も多い。この通過する人たちをどう取り込むか。取り込むことで鬼無里を知ってもらえる」という話にSさんは何度もうなずいていた。また、伊藤さんが「僕たち大人も『旅の駅』を鬼無里で暮らす人たちの生活の中心的な場所にしたいし、みんなにも生まれ育った鬼無里を誇りに思ってもらいたいという気持ちがある」という話をしたとき、Sさんは真剣な表情でうなずいていた。グループでの話し合いを終えて、教師がSさんに「大人の見方や考え方にふれてどうでしたか」と尋ねると、「来てくれる観光客だけでなく、生活の中で旅の駅を使っている人をどうつかまえていくか」と答えた。Sさんは小野さんや伊藤さんの思いにふれ、「生活の中で旅の駅を使っている人に対して」という見方、「鬼無里の実態をもっと知りたい」という必要感を得たのである。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	目的や意義を明確にしながら、大人と話し合いを深め、企画や活性化への意欲を高めることができたか、学習カードの記述や発言、つぶやきから評価する。
具体的変容	Kさんは学習カードに、「地域の人の意識から高めていかないと鬼無里の活性化にはならないと思うので、中学生が働きかけて、地域を盛り上げることが必要なのかなと思います。」と記述し、全体場で発表している。イベントの企画内容を超えて、「将来の鬼無里の活性化」に目を向け、意欲を高めた姿だととらえることができる。

実践の手応え（エビデンス）

大人の見方や考え方、生き様にふれることで、生徒は今まで自分たちにはなかった新しい見方や考え方を獲得する。そして、自分たちの活動や思いが大人に認められることで、さらに意欲が高まる。教師が行う事前の打ち合わせやコーディネートはとても苦勞だが、その分、生徒たちが得られる学びは大きいと実感している。また、大人にとっても「中学生の熱い思いにふれると心が動かされる」とのことで、学校と地域が相互に作用したり、連携したりすることのよさを、確かな手応えとして感じている。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑤

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

6年

協働の学びの質を高める ～自律した学習者の育成～

大町市立

美麻小中学校

実践スタイル

協働して学びを深める授業づくり

本時のねらい

動物の速さを比べる場面で、時間や距離をそろえる操作を通して、どの動物が速いかを比べることができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

単元の導入から使うマインドマップ(一枚型ポートフォリオ)

ねらい

単元の核心「単位をそろえることで、速さを比べることができる」に迫るために、自己の見方・考え方を自己更新していくツールとして使用する。

学習者のユニットとその意図

単元の入りから、一貫して単元の核心に関わるリフレクションを繰り返し、最初の自分と抜け出る時の自分の見方・考え方の自己更新を図ることで深い学びを図る。

単元の流れ	主な学習活動	・ 異学年合同の学び ・ 自律した個の学び ・ 遠隔合同の学び	授業時数
1 速さについて興味や関心をもつ	「速い」とはどういうことか考える。動物の速さについて、単位をそろえて比べる。	自律した個の学び 友との協働の学び	1
2 速さ・時間・道のりの関係を知り、二要素が分かると残りの一要素を求めることができることが分かる	速さ・道のり・時間のそれぞれの求め方を考え、学びを深める。		6
3 速さの問題を解く	マインドマップの再構成をし、見方・考え方を確かなものにする。	個が自律した見方・考え方の深まり	1



対話し協働して学ぶ児童たち

児童生徒の学び（協働の学びによせて）

学習場面では、個やグループの課題が明確で、さらに学びたいという意欲的自主的な学びの様子であった。1時間の授業の今日のゴールを明確にすることで、子どもたちは見通しをもって、何を考え、何をするよいかのかが分かり、終末に達成感が持てていたように感じた。

そこには、「分からないから教えて」「分かるようになりたい」「知りたい」と思う気持ちや願いが、自然に出てきて、友だちと協働して解決していこうとする追究する姿があった。そして、子どもたちも安心して学んでいるように思う。

これは、一朝一夕で表れたものでなく、今までに至る5年間の積み上げの上にあると言える。9年間を一貫して柱のように通している本校の教育システムとそれを理解して、授業づくりを進めてきた先生方の業績とも言える。毎年、新任の先生方を迎え、1年ごとに学校は更新されるが、学校のガイドライン(教育の道しるべ)が、ぶれずにそして大切にされてきた表れとも言える。

6年生の姿に、なかなか自分が追究したことを言えない子に、「〇〇したじゃん」「何を聞きたいんだっけ」と優しく聴く友だちの姿もあった。協働の学び、その中に思いやりの心が育っていると感じられた。

いろいろな思考の子がいて、教師は個と個をつなぐ役割をすることに努めた。板書を工夫して、低位生にも視覚的支援を図ったが、ノートの実物投影や電子黒板、タブレットなどのツールを使って、見せ合える支援も必要に感じている。

環境の構成場面では、机の並びは、黒板向きではなく、対話しやすいように向い合せにしている。グループでの対話だけでなく、自然にずっと立ち上がって、他グループのところに聴きに行くことも保障し、思考の活性化を図っている。

このような支援が有効に働き、児童生徒が深い学びに向かっているととらえたい。



活用効果（アセスメント）

評価の観点	マインドマップで可視化された「速さ」の見方・考え方をとらえる。
具体的変容	漠然としていた「速さ」にも基準となる単位があり、そのことから「速い」「遅い」などの比較もできることへの理解が深まる姿が見られた。

実践の手応え（エビデンス）

「速い」と「速さ」との違いについて、比べることを通して確認できた。

1メートルあたり何秒、1秒(単位時間)あたり何メートルと単位をそろえることで、比べられる良さを実感できた。

単位の核心につながる単位の問い(学習問題)を設定したことで、はじめとおわりで自分の考えがどう変わったか、どう学びが深まったかを自覚することができた。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑤

中学校	やる気	挑戦	自信
全校	夢プロジェクト第 11 号 「10 周年記念！土真ん中ウォーク盛り上げ隊」	塩尻市辰野町中学校組合立 両小野学校	
実践スタイル	異学年との意見交換や交流・同一チームで取組		

本時のねらい

土真ん中ウォークで地元の人に来てもらうために私たち両小野中学校生徒会は何をするか考える場面で、取り組みやすさと地元の人に来てくれる可能性の両面から、実行できそうな活動を検討することを通して、互いの意見を尊重しあいながらグループ内で合意形成することができる。

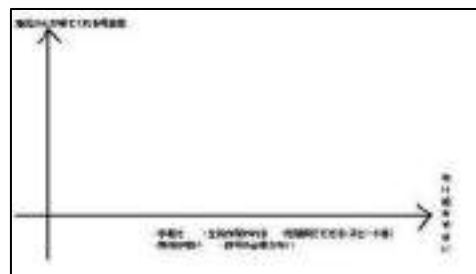
主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

2つの判断軸

ねらい

期間的に短いため地元の人に来てもらうためにはどんな事をすればよいか視覚的に考える



学習者のユニットとその意図

これまでの生徒集会での話し合いを振り返り、どんなことで困っているか出し合おう

- ・朝の生徒集会などでのグループで話し合う時間で、話し合いが活発にならないグループがある。
- ・グループ別の話し合いでうまく話が進まない。

話し合いがしやすいマニュアルを作ろう

- ・小学校の教科書（小学5・6年生）を参考にしよう。
- ・話し合いのテーマと、話し合いで目指す姿は明確にしたほうがいいな。
- ・意見を出してもらうための質問を用意したほうがいいな。
- ・問い返しの質問も用意したほうがいいな。

生徒集会1「地域貢献を見つめ返そう」

○「これまでの夢プロジェクトの様子をふりかえろう」

- ・油屋清掃（3月22日）
- ・記念樹（5月10日）
- ・小野宿（5月26日）
- ・青春プレイバック（6月15日）

○「両小野中学校の生徒会が目指す『地域貢献』とはなんだろうか？」

生徒が決め出した両小野中学校が目指す地域貢献

「地域を盛り上げ活性化させ感謝を伝える活動」

- ・次に予定している夢プロジェクト「土真ん中ウォーク」にこの集会を生かすために、土真ん中ウォークを企画している人たちの思いを聞いてみたい。（理事会）

理事会



生徒集会（全校）



理事会 「土真ん中ウォークの実行委員会から話を聞く」	理事会
・ 私たちが夢プロで植樹している塩嶺の森を広めようとして始まったのだな。 ・ 参加人数が減ってきているのが課題なんだな。 ・ 実行委員の人たちは、人集めやPRで困っているんだな。 ・ 全校のみんなに話を広げて、考えてみよう。	
生徒集会2 (問題の発見・確認, 議題の設定) 「夢プロジェクト第11号 『10周年記念! 土真ん中ウォーク盛り上げ隊』について」	↓
・ 1年生は、「土真ん中ウォーク」についてあまりよく理解していないから、理事会でプレゼンを行おう。 ・ 2・3年生も昨年度の土真ん中ウォークの様子を振り返った方がいいな。 ・ <u>うとう</u>を使ってネットで宣伝できないかな。 ・ 小野宿市のときのように、駅前でポケットティッシュを配ったらどうかな? 塩尻駅だと人が少ないから松本駅で宣伝したいな。	生徒集会(全校)
生徒集会3 (解決に向けての話し合い) 「地元の人に来てもらうための方法をさらに考えよう!」 ・ ハガキを書くのがいいんじゃないかな。 ・ 辰野町の有線に流そうよ。 ・ SNSだと来てくれなそうだな。 ・ 次の生徒集会でどんな方法になるのか楽しみだ。	
生徒集会4 (解決に向けての話し合い) 「土真ん中ウォークを盛り上げ活性化させるために私たち両小野中学校生徒会は何をするか①」	
生徒集会5 (解決方法の決定) 「土真ん中ウォークを盛り上げ活性化させるために私たち両小野中学校生徒会は何をするか②」	
生徒集会5で決めたことの実践 (決めたことの実践) (10月17日~10月25日)	
夢プロジェクト第11号 「10周年記念! 土真ん中ウォーク盛り上げ隊」 (10月26日)	有志
理事会 「生徒会引継ぎに向けた今年度の夢プロジェクトの振り返り集会の計画」	理事会
生徒集会6 「今年度の夢プロジェクトの振り返り」	全校



生徒集会1「地域貢献を見つめ返そう」の様子



生徒集会4「土真ん中ウォークを盛り上げ活性化させるために私たち両小野中学校生徒会は何をするか①」の様子



日本土真ん中ウォーク当日の様子

生徒の学び

この単元の最初は、グループでの話し合い活動が活発にならずに困ってきた生徒たちが、話し合いの際に困ったら助けになるものが欲しいと考え、自ら「話し合いマニュアル」を作成した。作成の際に、小学校の教科書（小学5・6年生）の国語の教科書を基に考えだした。その時に、思考ツールについて教師側から紹介し考えをまとめる時や新たな考えを生み出したい時に、どんな思考ツールを用いれば良いかを考えた。

生徒集会を重ねることで、「前は、あまり上手に司会が出来ずグループの意見が出なかったが、今回はマニュアルを使いながら進めたので安心してできたし、グループの人が前よりも意見を出してくれた。」や「前はあまり意見が言えなかったが今回は意見が言えたので次回も頑張りたい。」などの生徒の振り返りがあった。生徒集会での形態をグループでの活動を意図的に多くすることで、グループでの司会者の育成とグループ内での生徒の表現力の向上に繋がった。

本時では、話し合いマニュアルを用いることなく自分の力で司会をする生徒の姿があった。また、グループでの話し合いで意見を活発に出せるようになったため、話が脱線しそうなグループもあったが司会がきちんと本来の目的や話し合いのテーマに立ち返らせる姿があった。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	地域や社会の課題を見出し、具体的な対策を考え、実践し、地域や社会に参画できるようにすること。
具体的変容	自分の意見を他者に伝えたり、他者の意見を聞いたりして、地域貢献についての話し合いを通して納得して決められたかを振り返りの記述から評価する。

実践の手応え（エビデンス）

日本土真ん中ウォークに向けて、招待状を作り自分達が届けられて来てほしい人に送った。日本土真ん中ウォークに向けて集会を行うことで、生徒達は地域の行事を自分たちのこととして捉え、この両小野をPRするため、日本土真ん中ウォークに多くの人が来てもらうために話し合いを重ね、日本土真ん中ウォークを楽しみにしている生徒も多くいた。さらに、総合的な学習の時間と絡めどうしたら当日参加し

てくれる人が楽しめるか本気で追究し、挑戦する姿があった。例年、参加者が 300 名程度だった日本土真ん中ウォークが、今年は 400 名の参加があった。当日申込みの参加の数が 40 名弱であった。参加者の増加と日本土真ん中ウォークまでの実践により、生徒の自信につながった。また、今回の反省点も考えだし次への創意工夫を見せるなど、やる気を表している生徒の姿もある。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑥

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

6 年

地域を追究してふるさとについて学ぼう

辰野町塩尻市小学校組合立
両小野小学校

実践スタイル

地域の自然，歴史・文化，人と関わりながら児童が主体的に追究するふるさと学習

本時のねらい

たのめの里で頑張っている方々について調べてきた子どもたちが，自分たちが調べたことをもとに直接取材したり，仕事を体験したりすることを通して，その生き方や思いに寄り添うことができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

ボランティアさんへの取材の場

取材内容をまとめた紙 個人ファイル（今までの記録）

ねらい

グループごとに，自分たちの興味を持った方について調べられるようにした。

取材内容の発表の際，自分の考えや思いを記録し振り返ることができるようにした。

学習者のユニットとその意図

たのめの里で活躍されている方々の活動やたのめの里への思いを聞いたり考えたりする場面を設け，たのめの里の現状についていろいろな角度から気付けるようにする。さらに，これまで学習したことに加え，新たにたのめの里への思いに気付けるようにしたい。そして，たのめの里の方々が共通して持っている思いを考えることなどから，自己の生き方についても考えていく機会とする。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
現在のたのめの里について考え，話を聞きたい人に取材したり，体験したりすることを通して，自分が地域のためにできることを考える。	たのめの里に対する自分の思いや，家族の考えなどを聞く。	自律した個の学び	2
	現在たのめの里で活躍されている方々の話を聞く。		2
	グループごとに取材したり，甘酒造りを体験したりして，わかったことや感じたことを整理してまとめる。		5
	クラスで紹介し合い，再度活動への思いなどをお聞きして，自分と地域との関わりについて考える。		4



写真1：地域の方にグループごとに取材をしよう。



写真2：取材したことを発表し、聞き合おう。



写真3：昨年育てたお米で作った甘酒でおもてなし。

児童生徒の学び（自律した個の学びによせて）

1学期の学習のまとめとして、たのめの里の昔について地域を巡ったり、地域の歴史に詳しいボランティアさんに質問をしたりして調べ、まとめたことをもとにパンフレットを作った。A児は、そのパンフレットを使って「たのめの里をもっと知ってもらいたい。もっとたのめの里に来てほしい。」と、地域内外に自分たちが学習したことを発信したいという願いを持った。

2学期になって、地域の歴史学習から継続して、地域の現在の様子を意欲的に考えることができた。子どもたちは、地域の良さを再発見し、「たのめの里」を愛する気持ちを高め、さらに地域に貢献したいという思いを持つことにつながった。A児は、授業後の感想で「大人になっても小野から離れず、小野にいたい。」と語った。今地域で活躍する方々の話から、未来の自己の生き方を見つめる姿が見られた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	今地域のために頑張っている人の思いを知り、自分と地域との関わりについて考える。
具体的変容	子どもたちは、今地域のために頑張っている方々の話を聞き、自ら取材し、甘酒を造りそれをお客さんに振る舞うことを体験した。それらを通して、地域の方々の「ふるさとを大事にして、次の世代につなげよう」という思いや、「自分の仕事で地域の人喜んでくれている」というやりがいを感じることができた。地域社会とつながって生きている自分というものを認識し、自分たちが今地域のためにできることは何か、考えを深めることができた。

実践の手応え（エビデンス）

「たのめの学習」でこれまで地域について学習してきたことの6年間のまとめとして、たくさんの人々が自分たちの地域のために活動されているということを知ることができた。そんな方々の思いについて触れ、考えることで、自分が今から地域のためにどんなことができるのか考えるよい機会になった。実際に持った自分たちの思いを、どう行動に移していくことができるのかが今後の課題である。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑧

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
4 年	子どもの「願い」をもとにした外国語活動		北相木村立 北相木小学校

実践スタイル 「願い」をもとに、児童が充実したコミュニケーションを図る外国語活動

本時のねらい

楽しくコミュニケーションをするために「フルーツ・ショッピングゲーム」をする場面で、店員と客の立場を明確にして役割に応じて表現したり、モデルトークの良い例と悪い例を示して良いコミュニケーションの方法を考えたりすることを通して、二往復以上のやり取りをする。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ①教科書 Let's Try 2 デジタル教材 Let's Chant What do you want?
②英単語(果物)フラッシュカード ③果物カード・模擬硬貨 ④ワークシート

ねらい

- ①What do you want? の言い方に慣れ親しむ ②果物の英単語に慣れ親しむ
③本当の場面をイメージしてやり取りを行う ④学びを積み重ねる

学習者のユニットとその意図

子どもたちが充実したコミュニケーション活動をすることができるように、子どもの「願い」をもとに「自分だけのフルーツパフェを作る」という Unit Goal を設定し、食材や“What do you want?” の言い方に Chant やゲームを行いながら慣れ親しんだ上で「フルーツ・ショッピングゲーム」を行う。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
1 願いをもとに Unit Goal を明確にする。	・ Lesson Goal に繋がるデモンストレーションを視聴してイメージを持つ。	・ 自律した個の学び	1
2 What do you want? に慣れ親しむ。	・ Chant として“What do you want ～? I want ～.”を行う。	・ 自律した個の学び	3
3 オリジナルパフェを作る。	・ 売り手, 買い手に分かれて、英語でフルーツ・ショッピングゲームを行う。	・ 自律した個の学び	1
4 お互いのパフェを発表し合う。	・ 作ったパフェを発表し合い、学習のまとめをする。	・ 自律した個の学び	1



HRT と ALT による
モデルトーク



Let's Chant で “What do
you want?” に慣れ親しむ



売り手・買い手に分かれ
英語でやりとりしながら
果物の売り買いをする

児童生徒の学び（「願い」をもとにした学習における子どもたちの学びによせて）

“Let’s make original parfait～！”と声をかけると、子どもたちは「イエ～イ！」と反応をする。毎時間うれしそうに反応するのは、「自分だけのパフェを作る」という Unit Goal を子どもたちが心から楽しみしているからだ。本時はそのためのお買い物をする時間。自分だけのパフェを作るために、フルーツを買い物する時間だ。

はじめ、HRT と ALT で買い物のデモンストレーションを行った。内容は2パターン。つまらなそうに買う例と楽しそうに買う例だ。Bad point と Good point を子どもに聞くと「楽しそうじゃない。」「目を見ていない。」などすぐに本時に向けた課題が出てきた。そして、今日の買い物では、Loud & Clear・Try & Enjoy/Eye contact/Listen に気をつけていきたいと考えることができた。その後、“Let’s do a shopping～！”の声に元気づく反応した子どもたちは、思い思いのフルーツを買いに行った。

J児は、いつもは元気だが緊張してしまうとうまく話すことのできないことのある子である。店員役の友だちの前で緊張し、うまく言い出せず戸惑っていると、周りの子がそっとやさしく声をかける。その声に「そっか。」とうれしそうに反応すると、安心して買い物を楽しんでいった。

T児は、自分の考えたパフェに強い思いをもっていた。買ってきたフルーツのカードを本物のように扱い、自分のシートに貼っていた。「俺のすげーパフェ。もうちょっとで完成だ。」とうれしそうに次の買い物に向かって行った。

1回目の買い物が終わった時、児童を指名して、参考となる児童のやり取りの Demonstration を行った。子どもたちだけでやる Demonstration は新鮮であり、周りの子も「声をはっきりしている。」「Reaction がすばらしい」などと、自分の外国語表現をさらによくしていくための課題につなげることができた。

2回目の買い物も終わり、Reflection を書いている時、R児が「次の発表が楽しみ～」とつぶやいていた。「自分だけのパフェを作る」という単元を通した目標がしっかりと据わっていたことの現れではないだろうか。子どもたちの「願い」をもとに単元を構成したことで、子どもたちの意欲は最後まで継続していく、そんなことを学ばせてもらった授業であった。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	Listen/Loud & Clear/Try & Enjoy/Eye contact に気をつけて、二往復以上のやりとりをすることができたか。
具体的変容	フルーツカードやお金モデルを使い買い手・売り手に分かれたショッピングゲームを行ったこと、Today’s Point (Listen/Loud & Clear/Try & Enjoy/Eye contact) を意識したことにより、買い手は自分の欲しいものをていねいに伝えようとし、売り手は注文内容を正確に聞き取ろうとすることができ、二往復以上のやり取りを楽しんで行うことができた。

実践の手応え（エビデンス）

- 子どもたちの「願い」に沿った題材設定ができたことで子どもたちの活動意欲が高まり、子どもにとってのめあてや学習活動、Today’s Goal / Today’s Point を児童と一緒に考えた。
- モデルとなる対話内容を Chant やゲームを繰り返し慣れ親しんだことで、一人一人の子どもが自信をもって表現することができるようになり、英語でのコミュニケーション活動が充実したものとなった。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑨

小学校

異学年合同の学び

自律した個の学び

遠隔合同の学び

6 年

子どもの「願い」をもとにした外国語活動

北相木村立

北相木小学校

実践スタイル

「願い」をもとに、児童が充実したコミュニケーションを図る外国語学習

本時のねらい

北相木の好きなところや欲しいもの等について考えをもった子どもたちが、考えを語り合う Group Talk の場面で、教師と児童とで行う Demonstration で活動の見通しをもち、友のやり取りの良さを共有しながら繰り返し Group Talk をすることを通して、相手に伝わっているか確認しながら話したり Reaction を示しながら聞いたりする。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ①教科書 We Can 2 デジタル教材 Let's Chant What do you like?
- ②北相木村の拡大地図 ③ワークシート

ねらい

- ①What do you like? の言い方に慣れ親しむ
- ②イメージを広げながらコミュニケーションを行う ③学びを積み重ねる

学習者のユニットとその意図

双方向の生きたコミュニケーション活動となるように、子どもの「願い」をもとに「夢の北相木マップを作る」という Unit Goal を設定し、好き・ある、ない・欲しい等の表現に Chant で慣れ親しみ、Reaction や質問の仕方についても確認しながら、北相木村について英語で Group Talk を行う。

単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
1 願いをもとに Unit Goal を明確にする。	・ Lesson Goal に繋がるデモンストレーションを視聴してイメージを持つ。	・ 自律した個の学び	1
2 好き、ある/ない、欲しい等の表現に慣れ親しむ。	・ Chant, 英語モジュールで What do you like? を行う。 ・ Reaction や質問について。	・ 自律した個の学び	4
3 北相木の好きなところ、欲しいものを伝え合う。	・ 北相木村について英語で Group Talk を行う。	・ 自律した個の学び	1
4 夢の北相木マップをつくり伝え合う。	・ 夢の北相木マップをつくり上げ、学習のまとめをする。	・ 自律した個の学び	2



授業ははじめの Small Talk
「家に欲しいものは？」



教師と児童による
Demonstration



『夢の北相木マップ』を
作るための Group Talk

児童生徒の学び（経験の積み重ねを大切にしたい学びによせて）

「英語で日常会話のようなことができるようになりたい」6年生の1学期に子どもたちから出たこの願いを実現するべく、毎時間の授業の冒頭や英語モジュールの中に talk の時間を数多く入れ、英語で伝え合うことへの抵抗を減らしてきた。本時はまず Small Talk として What do you want in your house? をテーマに教師対教師の talk を視聴させ、その後教師対児童、児童対児童での talk へと移行した。児童対児童の talk になった瞬間、子どもたちはすぐさま “What do you want in your house?” と話し始めることができた。

Today's Point 共有の場面では、教師対教師の bad model を見せた後、児童の願い「今日は『つながる』会話をしたい」の実現には何が必要かを問うた。児童からは、話し手としては「確認しながら」「gesture を入れて」「繰り返して」「ゆっくり」などに気を付けること、聞き手としては「会話をつなげるヒント (hint to enjoy talking) を使って」「reaction を示して」などに気を付けると出され、児童の言葉で Today's Point を設定することができた。

メインの活動に入る前には、対話の見通しをもつために、教師2名と児童2名での demonstration を行った。demonstration に参加した児童は、はじめは傍らの教師に促されるままに発話していたが、次第に緊張がほぐれ自ら言葉を選んで発話するようになった。demonstration に参加した児童にとっては会話に慣れる場となり、見ていた児童にとっては、友だちが参加したことで、自分ごととしてとらえることのできる場面となった。

メインの Group Talk の1回目。子どもたちは戸惑いながらも、これまでに使ってきた hint to enjoy talking を利用しながら、知っている英単語を最大限活用してやり取りを行っていた。“I want an animal café.” “Why?” “I animal love love.” “I like animal? (教師)” “Yes. I like animal!” など、たどたどしいながらも英語でコミュニケーションをしようとする姿は、本校の目指す「双方向の生きたコミュニケーション」のひとつの形と見ることができた。2回目の group talk の前に、前述のやりとりをした児童の姿を全体の前で紹介し、その良さを共有する場を設けた。すると、「2回目の group talk ではより積極的に発話ができた」と多くの児童が実感し、reflection にもそのことを記していた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	自立した個の学びを土台に、双方向の生きたコミュニケーションとなっていたか。
具体的変容	これまで進んで会話に入っていくことができにくかった児童も hint to enjoy talking を利用して会話に参加することができていた。「質問と答え」で途切れてしまうことが多かった会話がつながるようになり、知っている英語でなんとか話そうとする姿や実感のこもった reaction をする姿が増えた。

実践の手応え（エビデンス）

- 子どもたちの「願い」に沿った題材設定ができたことで子どもたちの活動意欲が高まり、子どもにとってのめあてや学習活動、Today's Goal/Today's Pointを児童と一緒に考えることができた。
- 単元のモデルとなる対話の内容をChant や英語モジュールを繰り返し慣れ親しんだことで、一人一人の子どもが自信をもって表現することができるようになり、双方向の生きたコミュニケーション活動が見られるようになった。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑩

中学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
3年	地域の特色を生かした総合的な学習の時間		南牧村立 南牧中学校

実践スタイル ふるさと南牧について考え、中学生議会にて提案を行う

本時のねらい

中学生議会で発表する再質問を確かめる場面で、他の班の構想を聞いたり、意見交換をしたりしたことを元に、自分たちの再質問を見返す活動を通して、「南牧を住みやすい村」にするために、よりよい方向を話し合いから再質問を作成することができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

ワールドカフェ方式（学習形態）
付箋（青，赤，黄），ホワイトボード

ねらい

少人数の前なので発言しやすく、また相手との距離も近く、話を聞いてもらいやすい環境のため、自分の思った意見を言いやすい。また付箋を使用することで賛成なのか、アドバイスがあるのか受け手にわかりやすい。

学習者のユニットとその意図

議会提案を行うにあたりいくつかの班に分かれて構想を考えた。3 学年生徒は全体で 32 人であるが、16 人ずつ 2 クラスに分かれており、多様な考え方に触れる機会が少ない。そこで、学年全員でワールドカフェ方式を取り入れ、それぞれ個人の考え方や意見を出し合い、短時間で共有できるように設定した。

単元の流れ	主な学習活動	異学年合同の学び 自律した個の学び 遠隔合同の学び	授業時数
1 提言案を考える	・調査を行い、提言案を作成。 ・提言案を友と伝え合う。	自律した個の学び	3
2 提言案を見直し、伝えよう	・友との意見交換を受けて、再度提言案を見直す。 ・提言のための情報収集を行う。		4
	・提言を作成し、村に提出する。 ・村の回答をふまえて、再質問を検討する。 ・まとめた資料や提言案を友と伝え合う。 ・中学生議会にて提案を行う。		6
3 振り返り、まとめ	・地域社会の一員としての生き方を見つめる。		1



写真1：3学年合同での議会に向けた事前学習の様子。(9月)



写真2：再質問を考えていく場面での意見交換の様子。(本時)



写真3：中学生議会にて、「住みやすい村づくり」について提言を行う様子。(10月)

児童生徒の学び（南牧中学校3年生の学びによせて）

3年間の総合的な学習の時間の集大成として、南牧村の村当局と村議会議員に向けて提案するという相手意識をもってワールドカフェ方式で本時授業を行った。「これからの南牧村の未来」というテーマのもと、村の「産業」について質問を考えた班では、中学生による村のパンフレットの作成について提案した。提案にはスマホを活用したスタンプラリーや季節毎のラリーの提案、特典（景品）・スタンプデザインなどの具体的な内容について、それぞれ他の班の視点から意見交流ができた。

元の班に戻り、意見の再検討をする場面では、農産物や酪農製品の売り上げに貢献できるのではないかとという他の班の意見書から、取り入れようとする話合いや、自然環境を活かした観光開発はできないだろうかという意見書から、エコツーリズムの考え方が参考にできるのではないかと議論する姿が見られた。

振り返りの場面では、「自分の班の考え以外にも、他の班と重なるところや、他の班の考えも取り入れて修正しなくてはいけないこともあることがわかった」という意見や、「自分の班のことだけではなく、他の班の意見も取り入れて、色々な人にとって住みやすい村になるような提言案に仕上げていきたい」という、より良い方向性を考えていこうとする姿があった。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	他の班の意見を聞いたり、意見交換をしたりしたことを基に、自分たちの意見（再質問書）を見直す活動を取り入れたことは、「住みやすい村」にするためには、様々な視点から物事を考え、多くの人の立場に立ち、よりよい方向性を考えていく必要があることに気づくことができたか。
具体的変容	友の意見を受けたことによって、違う視点から自分たちの意見（再質問）を見直すことができた。

実践の手応え（エビデンス）

地域の特徴を生かした総合的な学習の時間として、3年間のつながりを意識した単元を展開した。村に発信していくというゴールを設定し、1年生から学習してきたことは、ふるさとに親しみを持ち、誇りをもって語る姿に表れていた。同時に、少子高齢化や過疎化といった地域の諸問題にも向き合い、地域の一員として村の将来を考えることにつながった。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑪

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
2 年	算数の授業で他校と交流しよう		伊那市立 新山小学校

実践スタイル 交流活動の発展としての教科（算数）における遠隔合同の学び

本時のねらい

3桁のたし算ひき算の方法を学んだ子どもたちが、手良小学校2年生とともに、自分たちで考えた穴埋め問題を出し合い、考えた過程を発表し合うことを通して、(2位数) ± (2位数) の筆算の穴埋め問題を解く方法を理解することができる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

ワークシート，電子黒板，iPad，TV会議システム（Zoom）

ねらい

映像と音声での情報の交換・共有ができる場面を設定し、普段からの交流先である手良小学校の子どもたちと問題を出し合ったり、考えた過程を発表し合ったりさせることで、自分の考えを意欲的に相手に伝えることができるようにする。

学習者のユニットとその意図

交流先である、同じ中学校区の手良小学校の2年生も、12人と手良小学校の中でも少人数なクラスである。これまでも2時間目休みにお互いの近況を報告し合ったり、図工でつくった作品を紹介し合ったりする活動を行ってきており、今後も、同じ課題で図工の作品をつくり、発表し合う場面や、国語の同じ課題のものを共有し合う場面を考えている。

今回の算数の学習では、それぞれの学校で、くり上がりのあるたし算，くり下がりのあるひき算の計算の学習を進めてきたうえで、単元の終末段階で二校合同の学習場面を設定する。特に本時では，□を用いた穴埋め計算を扱う。高度な学習内容となるため，問題によっては解くことが難しいものも出てくる。クラスの仲間とまとまって，協力し合って問題解決に取り組む姿を期待するとともに，手良小学校の子どもたちとの学習を進める中で，さらに多様な考えに触れたり，自分の考えを堂々と相手に伝えたりすることを通して，人との関わりを広げたり深めたりする力をさらに育んでいきたい。

単元の流れ	主な学習活動（単元終末段階）	・異学年合同の学び ・自律した個の学び ・遠隔合同の学び	授業時数
既習の2位数の加減の筆算の仕組みを用いて，くり上がりやくり下がりが2回ある場合の加減の筆算の仕方	（全12時間中第9時） ・筆算の穴埋め問題に挑戦する。	・自律した個の学び →□の数が1つや2つの穴埋め問題を，くり上がり・くり下がりに気をつけて解くことができる。	1
	（全12時間中第10時） ・相手校に解いてもらいたい筆算の穴埋め問題を考える。	・自律した個の学び →穴埋め問題をつくり，それが既習の範囲で計算で	1

を、児童自身に見いだせるようにする。 さらにその発展として、(3位数)ー(2位数)で百の位からくり下がり のない筆算を扱い、 計算を確実なもの にしていく。	・自分たちでも解いていく中で、問題の解き方をまとめる。	きるのかどうかを確かめる。	
	(全12時間中第11時) ・つくった穴埋め問題を相手校と出し合い、問題の解き方や考え方を共有する。	・遠隔合同の学び →穴埋め問題を正しく計算し、その理由を説明することができる。	1
	(全12時間中第12時) ・学習内容をふりかえり、学んだことを自分なりにまとめる。	・自立した個の学び →学習内容をふりかえり、学んだことを自分なりにまとめることができる。	1



写真1：相手校から出された問題を本校児童が解いている。



写真2：本校児童が作った問題を相手校児童が解いている様子を見ている。



写真3：それぞれの問題を解き合った後に、その方法や考え方を共有し合っている。

児童生徒の学び

普段からTV交流していた上、遠隔授業も3回目となり、最初から打ち解けた様子で授業が進んだ。自分の作った問題を相手の学校の友だちが解いてくれるということで、興味をもって解く様子を見ており、学習意欲の高まりを感じた。計算方法の共有では、難しい問題に対して、相手校の児童が「繰り下がりをした後の数字を先に考える」という、本校児童が発表した計算方法を参考にして問題を解いたことを発表した。本校からも「一の位から順に考える」と、明文化していない部分を意識できたという声が上がった。学校・学級によって、注目する点や注意する点は異なってくるため、その部分をお互いに共有できたことは、子どもたちの考えの広がりとなった。何度も計算練習をするだけでは身に付かない、考え方の質を上げる時間となったように思う。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	本時の共同追究の場面では、各校のまとめを共有し、より確かなまとめをつくるというところで、遠隔交流をする良さがみられたか。
具体的変容	TV会議システム（Zoom）を活用することで、相手側の問題の解き方から学んだり、自分たちが思ったことを伝えあったりして、新たな視点からより確かなまとめを作っていくことができた。

実践の手応え（エビデンス）

協力し合って問題解決に取り組み、相手校の子どもたちとの学習を進める中で、多様な考え方に触れたり、自分の考えを堂々と相手に伝えたりする場面が多くみられたことから、このような取組は、人との関わりを広げたり深めたりする力を育む上で有効であるといえる。

全国へき地教育研究大会長野大会 事例⑫

小学校	異学年合同の学び	自律した個の学び	遠隔合同の学び
1 年	1 年算数科 たしざん (2) 2 年算数科 かけざん (1)		飯田市立 上村小学校
実践スタイル	複式学年別学習		

学習者のユニットとその意図

1 年生 5 名，2 年生 3 名の複式学級で日々生活をしている。小規模特認校の関係で児童の転出入を考慮し，算数科においては日常的に複式学年別指導に取り組んでいる。

1 年生は 2 年生の学習の姿をいつも間近で見ているため，複式学年別学習の流れにもすぐに慣れることができた。また，学習ガイドをもとに学習リーダーが進めていくため，自分たちで学習を進めていく意識が強く，どうすれば問題を解決できるかを意欲的に考えている。さらに，自分の考えを友だちに伝えるための表現の仕方や書き方を工夫することを通して，学び合いの中で話す力や聞く力の高まりが見られる。また，2 年生も 1 年生の姿から自分たちの課題を考えたり，振り返りから 1 年生の学習を再確認したりと，互いに良い刺激となっている。

単元のねらい

1 年：被加数 5 以下のたし算の方法を考える場面で，10 のまとまりをつくって計算することを通して，加数・被加数のどちらかを分解しても計算できることに気づく。

2 年：かけ算の意味を理解し，5，2，3，4 の段のかけ算を構成し，九九を唱えたり，それを適用したりできる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ・フラッシュカード
- ・学習ガイド
- ・学び合いカード
- ・ヒントカード
- ・計算カード
- ・短冊カード
- ・タイマー
- ・タブレット (e ライブラリアドバンス)

ねらい

教師が別の学年に直接指導をしているときにも，子どもが自分たちで学習を進めることができる。また，ヒントカードによってつまずきのある児童に対して即座に手立てを与えることができる。

<1 年> 単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び	授業時数
1 くり上がりのあるたし算の仕方を考える	・10 のまとまりをつくることでくり上がりのあるたし算が簡単にできることに気付く。	・異学年合同の学び ・自律した個の学び	6
2 たし算の計算練習	・たし算カードやタブレットを使って計算の練習をする。	・自律した個の学び	4
<2 年> 単元の流れ	主な学習活動	・異学年合同の学び ・自律した個の学び	授業時数
1 かけ算の式について理解する	・「何のいくつ分」かを考え，かけ算の意味や式の書き方を知る。 ・「倍」の意味とかけ算について知る。	・異学年合同の学び ・自律した個の学び	4
2 かけ算の九九	・5，2，3，4 の段の九九を構成する。 ・九九を使って問題を解く。 ・かけ算の問題をつくる。	・異学年合同の学び ・自律した個の学び	12



複式学年別学習の様子



それぞれの学年のよさを共有し、
学びに生かす



一人一人が意欲的に問題を解決し
ようと取り組む

児童生徒の学び（全国へき地教育研究大会の姿から）

1年A児は本単元で「10のまとまりをつくって10+○の形にすればよい」と意見が出たときに、どういことか全くわからずにいた。学び合いの中で友だちが数図ブロックを使った説明を聞くと、「なんで〜なるの?」「これ○○さんと似ている」と理解を深める様子が見られた。しかし、いざ自分でさくらんぼ計算に取り掛かると、手が止まってしまった。ところどころ教師のヒントを参考に学習し、時間はかかるが自分の力で計算できるようになって迎えた全国へき地教育研究大会。被加数を分解して10のまとまりをつくっても計算できることを学習する本時だったが、教師の予想とは裏腹にA児は数え足しで答えを求めた。大勢の参観者に観られていることもあったのか、今の自分の力で確実に答えを出せる方法を選んだのだ。しかし学び合いの中では小さい数を分解して計算したB児のやり方を「わかりやすい」と話し、8と4のどちらを分解するのがやりやすいか考える場面で「こっち（4）がいい」と発言した。

A児は当初、学び合いの場面で何を話していいかわからずにいた。しかし、2年生が隣で学習している様子を参考にしたり、学び合いカードを活用して学習したりしてきたことで、A児にとって学び合いの場は安心して説明したり質問したりできる場になってきた。本単元後半では、学び合いで友だちの説明を聞いたり、自分で説明したりする中で自信をつけたA児は、自分の力でさくらんぼ計算ができるようになった。

2年C児は入学当初は学年1名だった。単式で学習する際にも複式の進め方を練習し、学び合いは教師の出すキャラクターとの学び合いだった。この学年が今年度は3名になり、友との学び合いを毎日楽しみにしている。

C児は1年時から隣で2年生（現3年生）が九九を唱えるのを聞き、自らも教室に掲示してある九九表を見ながら唱えていたので、すぐに九九を覚えることができた。しかし、かけ算の意味を十分に理解していたわけではないので、かけ算の意味を学習した際には「そういうことか」と嬉しそうな様子が見られた。

全国へき地教育研究大会では、基準量が後に示された問題文から式を考えることで、かけ算の意味理解を深めた。はじめの予想では、3人とも問題文に出てくる数の順番通りに「 4×5 」と立式した。

「一人学び」では考えのもととなる図の描き方で戸惑っていたが「 5×4 」と改めた。学び合いでは、他の2人は「 4×5 」と考え、意見が分かれた。C児はどのように説明すればよいのかわからず、話し合いが止まってしまったので教師から「何個のいくつ分」か考えるように助言すると、3人で

「 5×4 」という式を導くことができた。理解を深めるため、もう一問3人で問題を解いた。すると、「3cmの4本分だから 3×4 になる。」と理由を明らかにして説明することができた。「一人学び」では考えに自信が持てずにいたC児だったが、学び合いの中で自分の考えを確かにすることができた。

活用効果（アセスメント）

評価の観点	学習リーダーを中心に学習を進め、学び合いの中で友との関わりから自身の見方・考え方を深めることができる。
具体的変容	1年生：複式学年別学習では学習の流れがパターン化されているため、次に何をするのか見通しをもって進めており、「一人学び」で必要な道具は自分から机上に持ってきて使うことができているD児は字を書くことが苦手だが、学習を進めるため、そして学び合いで自分の考えを伝えるために、一生懸命ノートに書く姿が見られた。E児は学び合いの中で友だちの考えを聴き、自分でも説明できるようになるために集中して耳を傾ける姿が見られた。 2年生：F生は転入時から算数に苦手意識を持っており、「一人学び」には不安を感じているため、ついネガティブな発言をしてしまうことがある。しかし、3人で問題を考える場面では自由に発言・質問ができるため、自分の考えを堂々と伝えられるようになった。G生は自分ができないことに大きな不安を感じ、泣き出してしまうこともあるが、友との学び合いの中で、「間違えてもよい」「みんなで考えればよい」と前向きにとらえ、気持ちを切り替えられるようになった。

実践の手応え（エビデンス）

2年生は昨年度から複式学年別指導を始め、今では学習ガイドに沿って進めていくことが当たり前のようになっている。当初は1・2年生には難しいのではという思いもあったが、自分たちで進めていく学習が子どもたちにとっては楽しいようで、非常に意欲的に取り組んでいる。また異学年合同の学びとしての利点もある。例えば授業の最後には、互いの振り返りを聴く場面を適宜つくすることで、1年生は2年生の話し方を聞き、どんな話し方をすればよいのかを学んでいる。また、直接関わっているわけではないが、隣で学習する2年生の様子から、学習する姿勢を学んでいる。2年生も1年生の良い姿から学習態度を見直すなど、向上心を持って取り組んでいる。

複式学年別指導の難点でもあり、私の課題でもあるが、二つの学年の学習状況を把握しづらいことがある。自身の授業を見ると、「ここで支援に入ればよかった」「ここでは子どもたちに学び合わせたかった」と反省点が山ほどある。「一人学び」や学び合いで教師の出を少なくし、両学年の状況を把握するために、どこで何をどのように学ばせるのかを明確にし、子どもの学習を支援できるよう研究を重ねたい。

資料

□ 中学校

- ・ 合同教科会
- ・ ICT遠隔合同授業
- ・ テスト共有ネットワーク
- ・ テスト学習プリント

資料：事例①～④

学校名	活動内容
川上村立川上中学校 【連携校】 南牧村立南牧中学校 小海町北相木村南相木村 中学校組合立小海中学校	若手で経験の少ない教員が多く，教材研究やテスト作成など，不安や負担も多い。 3校合同で教科会を行い，教材や授業について情報交換を行ったり，テスト作成を分担して負担を軽減したりしながら，日々の授業改善を図り，生徒の資質・能力の育成を目指し取り組んでいる。
伊那市立高遠中学校 【連携校】 伊那市立長谷中学校 伊那市立高遠北小学校 伊那市立高遠小学校 伊那市立長谷小学校	離れた地域にいる専門講師をZoomでつなぎ，専門外の教科担任を支援する活動。 美術科と技術科を合わせて「造形とイルミネーションプログラム」という単元を設定し，実施。遠隔で専門家から助言をもらい，生徒の願いに寄り添う授業を模索。
阿南町立阿南第一中学校 【連携校】 天龍村立天龍中学校 売木村立売木中学校 泰阜村立泰阜中学校 飯田市立遠山中学校 阿南町立阿南第二中学校	山間地の小規模校での教科会や学年会の充実を目的に，教科会やテスト作成の情報交換を実施。 6校合同教科会として年2回の全体会を行いながら，Webサイトの運用でフォローアップする形態を模索。場合によってはコーディネート教員がTTで授業支援を実施。
小川村立小川中学校 【連携校】 長野市立中条中学校 長野市立信州新町中学校 長野市立七二会中学校 長野市立信更中学校 長野市立大岡中学校	コーディネート教員と6校の英語科教員が連携を図りながら，学力向上に向けた取組や合同授業の可能性を模索。 加えて，コーディネート教員がTTで授業支援を行い，生徒の対話的な学びが促進できるよう挑戦。数学科は合同で共通のテストを作成。

中学校

教科会

テスト

教材

定期的な3校合同教科会の実践から

拠点校：川上村立川上中学校

南牧村立南牧中学校

小海町北相木村南相木村中学校組合立小海中学校

連携スタイル

近隣3校で教科会を行い、指導内容やテスト作成等を連携して行う。

連携のねらい

川上村立川上中学校、南牧村立南牧中学校、組合立小海中学校の3校は山間地小規模校で、ここ数年、生徒数の減少が続いている。教員数も少なく、どの教科も1～2人で教科の授業を担当している。若手で経験の少ない教員が多く、教材研究やテスト作成など、不安や負担も多い。そこで、平成27年度(2015年度)より、3校合同で教科会を行い、教材や授業について情報交換を行ったり、テスト作成を分担して負担を軽減したりしながら、日々の授業改善を図り、生徒の資質・能力の育成を目指し取り組んでいる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT機器等とそのねらい

教材等

- ・電子メールの利用
- ・動画、画像の活用

ねらい

- ・テスト問題を共有して生徒の実態把握を行ったり、動画、画像による授業記録を見合って授業改善を図ったりする。

教科の運営の仕方

拠点校のエリアコーディネーター教員が、3校合同教科会の計画や運営を行っている。全教科が行う教科会は年3～4回を計画し、必要に応じて各教科で会合を設けたり、メールで連絡を取り合ったりする。各教科会の様子や各校公開授業の計画などの情報を共有するために、教科会通信をエリアコーディネーター教員が作成する。

連携の流れ	主な活動	・教科会 ・テスト ・教材
5月：第1回合同教科会 ↓	・年間計画について ・全国学力・学習状況調査について	共通して行うテストの確認 教材、指導方法の共有
7月：第2回合同教科会 ↓	・各校の実践発表 ・実践上の悩みの共有	教材、指導方法の共有
第3回合同教科会 ↓	・授業公開等	授業実践の共有
2月：第4回合同教科会	・1年間のまとめ	各校の成果報告 次年度に向けた取組の確認

※3回目は2学期中に各教科の実情に応じて実施

連携の様子



写真1：ビデオでお互いの授業記録を見合い、意見交換をしている（数学科）



写真2：実践した授業を振り返って、改善について語る（理科）



写真3：タブレット端末を録画しながら指導内容を検討する（保健体育科）

年間指導計画を共有する際は、学習進度や単元配列等を検討し、できるだけ3校統一して授業をすすめられるようにしている。また、定期テストの期日も3校で同日に設定し、すべての教科ではないが、テスト問題の全部、もしくは一部を各校で分担して作成している。

年4回実施している合同教科会では、教師の専門性を高めるために、同じ教科の教員が集まり、各校の情報を交換したり教材観や指導観を語り合ったりしている。夏休みに行う第2回合同教科会は半日開催とし、指導主事や近隣校の校長先生などを助言者として招き、授業に関する日頃の悩みを出し合いながら、指導方法や教材開発についてじっくりと意見交換する場としている。数学科では、お互いのビデオによる授業記録を見合い、参考となる工夫点を共有したり、改善点について意見交換したりしている。保健体育科では、実際に体を動かして教材研究を行い、2学期に行う単元の授業内容を練り合ったり、ICT機器の効果的な活用場面について考え合ったりしている。

活用効果（アセスメント）

連携の観点	生徒の学力向上のための学校間、教師間の連携
具体的変容	共通のテストをもとに自校の生徒の学力を分析したり、同じ単元について教材研究を行ったりすることで、授業改善が図られている。

連携の手応え（エビデンス）

小規模で複数の教員と教科会を開くことのできない近隣の中学校同士で定期的に合同教科会をもち、自分の授業で課題に感じていることを話し合ったり、実際に演習したりすることを通して、共に授業を構想できるよさがある。また、共通のテストを実施することで、点数の比較だけではなく、結果からお互いの授業について改善を図ろうとPDCAサイクルを意識した取組につながっている。さらに、外部の研修会に参加した内容を他校の教員に伝え、研修の内容を広めてよりよい実践につながっている様子もあり、合同教科会が有効に機能している。

中学校

教科会

テスト

教材

学びの質を向上させる遠隔授業

拠点校：伊那市立高遠中学校

伊那市立長谷中学校 伊那市立高遠北小学校

伊那市立高遠小学校 伊那市立長谷小学校

連携スタイル

テレビ会議システムを通して、大学の専門家の助言を得ることができる授業づくり。

連携のねらい

「生徒と専門家をつなぐこと」「専門外の教科担任を支援すること」を目的とした遠隔授業を行い、生徒の学びの質を高める。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT 機器等とそのねらい

教材等

- ・タブレット端末に Zoom をインストールしてから、マイクスピーカーと接続し、遠隔の専門講師とのコミュニケーションに使用する。

ねらい

- ・Zoom で生徒と大学にいる専門講師をつなぐことで、具体を通して専門外の教科担任を支援すると共に、生徒一人一人が専門講師からの助言を受けられるようにする。

教科の運営の仕方

教科を越えて「造形とイルミネーションプログラム」(STEAM 教育)の単元を設定し、美術科と技術・家庭科(技術分野)の時間を合わせ 21 時間設定し、6 回の遠隔授業を実施した。

連携の流れ	主な活動	・教材
信州大学教育学部 信州大学工学部 ものづくり大学 との打合せ ↓ 遠隔授業の実施	第 1 時 「単元を通しての学習の見通しをもつ」 (専門家、専門講師と顔合わせ)	Zoom で専門家の先生や学生とつながり、これから一緒に学び合う意欲を高める。
	第 3・4 時 「電気回路の製作をする」 第 7・8 時 (少人数指導)	全体指導を受けた後、グループ毎に専門講師から指導を受けて、電気回路の組み立てを行う。
	第 9・10 時「電気回路の製作と動作確認をする」 (少人数指導)	グループ毎に専門講師から指導を受けて、電気回路の動作確認を行う。
	第 11 時 「デザイン工学の観点からの講義を受ける」 (全体指導)	Zoom で専門家の先生から講義を受けて、イルミネーションのプログラムについて発想を広げる。
	第 21 時 「製作物のプレゼンテーションを行う」	Zoom で教室と大学をつなぎ、プレゼンテーションを行う。

資料-事例②



写真1：タブレット端末に映し出されるお手本を参考に、製作に取り組む生徒



写真2：友に作業の様子を撮影してもらい、個別に講師から助言をしてもらう生徒



写真3：大型ディスプレイに映る講師からの助言を熱心に聞く生徒たち

連携の様子

※合科…ここでは技術科と美術科をひとまとまりのものとした学習のこと

美術科の教師が、技術・家庭科（技術分野）と連携した授業を行うために、ICT 機器を使用して中学校側と大学側とがつながり、打合せを行える体制作りから始めた。日程調整が課題だったが、事前に技術分野の授業展開や必要な備品についてレクチャーを受けたので、※合科としての単元展開を作成することができた。

授業中における指導者と遠隔の外部指導者とのコミュニケーションに不安があったが、事前のテレビ会議のおかげで、予定通りに授業を進めることができた。テレビ会議では、生徒とのコミュニケーションをリードすること、生徒に対する言葉遣い、「出の場面」と「フォローの場面」を明確にすること等について、綿密に打合せを行った。

製作にかかわる授業では、専門講師による大型ディスプレイを使った全体指導の他、3名の生徒に対して1名の専門学部の学生を配することで、指導の個別化を図った。習得の授業では、ハンダ付けをする生徒、タブレット端末で様子を撮る生徒などを分担し、専門講師より個別に指導を受けられるようにした。

活用効果（アセスメント）

連携の観点	遠隔授業を行うことで、生徒の学習する姿の変容。
具体的変容	専門講師との個別のやり取りを通して、学習への興味・関心を高め、積極的に学習活動に取り組む生徒が増えた。

連携の手応え（エビデンス）

生徒の学習意欲が高まり、積極性が引き出されたことだけでなく、ハンダ付けの技能が高まったり、独創性の高いイルミネーションプログラムを構想したりする等、生徒に確実な進歩が見られた。また、遠隔の学校とやり取りをするため、声の大きさや内容のわかりやすさに工夫をする等、コミュニケーション能力が向上する生徒の姿も伺えた。

教師にとっては、免許を有する教師の助言を受けることで、技術科に関する専門的な知識が増えたり、専門性のある具体的な指導をしたりすることができた。また、美術科教師としての専門性を生かした指導と、専門講師からの技術科に関する専門的な助言との、両方を合わせることで、より生徒の願いに寄り添う指導が可能になった。

遠隔授業の実践は、生徒と教師の両者にとって大きな成果が見込める。ICT 機器のさらなる活用とともに、人と人をつなぐ関係作りの充実が期待される。

中学校

教科会

テスト

教材

共通テストによって深まる連携

拠点校：阿南町立阿南第一中学校

天龍村立天龍中学校 売木村立売木中学校

泰阜村立泰阜中学校 飯田市立遠山中学校 阿南町立阿南第二中学校

連携スタイル

6校で教科会を行い、共通テストを連携して作成する。

連携のねらい

エリアコーディネーター教員を中心に6校の合同教科会の実施や情報共有のためのネットワークづくりをすすめる。エリアコーディネーター教員とは、山間・小規模校の指導力向上のための教員配置事業(ACT)の一環として、加配された教員のことであり、山間地の学校規模が小規模化し、教科会や学年会が組織できない小・中学校が増えていく中で、各学校を訪問して教員の指導力を高めたり、情報を共有したりする役割を担っている。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT機器等とそのねらい

教材等

- ・全国学力・学習状況調査
- ・共通テスト

ねらい

- ・各学校のテストに関する情報を共有するとともに、その結果も共有し合うことで、指導の改善にいかしていく。

教科の運営の仕方

- ・各校の定期テストや授業で使えるプリントの共有化を図るネットワークづくり
- ・全国学力・学習状況調査等の分析と改善の方向づくり
- ・エリアコーディネーター教員が各校を訪問し、指導力向上の支援や情報提供を行う。

連携の流れ	主な活動	・教科会 ・テスト ・教材
4月 第1回6校合同教科会 ・運営計画立案 ・全国学力・学習状況調査の早期採点支援 月1回 Actによる学校訪問 10月 第2回6校合同教科会 ・情報交換	国語科 ・共通テストの実施と結果分析 ・特別支援での生徒の興味関心の高め方	・共通テスト
	数学科 ・共通テスト（年3回）の実施と分析 ・教材の工夫点紹介	・共通テスト
	社会科 ・6校合同教科会 Web サイトを使ってテスト問題や学習プリントなどの情報共有	・教材（学習プリント）
	理科 ・授業でのICT活用や教材の工夫について ・新学習指導要領についての話し合い	・教材
	英語科 ・共通テストの問題作成と検討 ・授業づくりに関する情報交換	・共通テスト

連携の様子



写真1：6校合同教科会の様子



写真2：Web サイトを利用したデータのやりとり

6校合同教科会として年2回の全体会を行った。4月末の全体会では、全国学力・学習状況調査の早期採点を行ったり、6校の教科会としての取組内容を検討したりした。10月の全体会では、共通テストの内容や実施後の結果の活用の仕方を検討した。

各校でそれぞれ行っている定期テストのうち、教科ごとに回数を決めて共通テストとして実施することにした。共通テストを行うメリットとしては、小規模校は生徒数が少ないため客観的なデータに基づきにくい、複数の学校で共通テストを行うことで受験者数が多くなるため、より客観的なデータを得ることができると考えられる。

また、小規模校では、毎回のテストを1人の教科担任で作成することになる。しかし、各校で実施している定期テストなどを共有化することで、テスト作成の参考にすることができる。Webサイトを利用してネットワークを作ったことで、いつでも使うことができるようになった。

エリアコーディネーター教員が、各校を定期的に訪問し、授業について面談をしたりTTで授業支援を行ったりして、先生方の授業や指導の良さを通信で各校に伝え、学校が離れていても、情報交換をしたりアイデアを共有したりできるようにしていた。

活用効果（アセスメント）

連携の観点	情報交換サイトのネットワークができたことで、どのような情報が共有されるようになったか。
具体的変容	学校間の距離が遠い各学校で情報共有をいかに行うかが課題であったが、ネットワークができたことで、様々な情報共有がよりしやすくなった。

連携の手応え（エビデンス）

各校に1人の教科担当で、授業の進め方やテスト作成などに課題をもっていた先生方が、6校で合同教科会をもつことで必要な情報を得たり相談したりする様子がうかがえた。これからさらにネットワークを活用することで授業改善につながっていくと思われる。

中学校

教科会

テスト

教材

英語科のゆたかな学びを目指して

拠点校：小川村立小川中学校

長野市立中条中学校，長野市立信州新町中学校

長野市立七二会中学校，長野市立信更中学校，長野市立大岡中学校

連携スタイル

課題の共有から始まる連携 ～授業改善，テスト改善を通して～

連携のねらい

エリアコーディネート教員（英語科）が中心となって，6校の英語科教員と連携を図りながら，学力向上に向けた取組や合同授業の可能性を模索している。本年度の全国学力・学習状況調査では，学力調査（自己採点）や質問紙調査で，特に「話すこと」に関する結果に課題が見られた。そこで，エリアコーディネート教員は6校全ての学年・学級で英語の授業にT2として入り，各校のT1教員と英語でやりとりする場面を見せるなど，生徒の対話的な学びを促進する授業を実践している。また，生徒同士の英語を使う場面が増えることを願い，学校を越えて合同授業を行う等の実践に取り組んでいる。

主に活用した教材・コンテンツ・ICT機器等とそのねらい

教材等

- ・全国学力・学習状況調査の結果を基にした統一定期テスト
- ・英語科における合同授業

ねらい

- ・学力調査で見られた各校の課題を近隣の英語科教員と共有し，定期テストの一部に統一問題を組み込むことで，共通の視点をもって授業改善を図る。

教科の運営の仕方

- ・全国学力・学習状況調査等の分析と授業改善の方向性を決め出す。
- ・課題の改善を図る評価問題（統一問題として定期テストに組み込む）
- ・合同授業の計画立案

連携の流れ	主な活動	教科会 テスト 教材
4月 全国学力・学習状況調査	・早期採点，分析	・教科会（英語）
5月 合同教科会（数・英）	・各校英語科教員との懇談，方向性確認	
6月 合同教科会（数・英）	・合同授業① 小川中，中条中（3学年のみ）	・教科会（英語，数学，保健体育）
7月 統一問題（1学期末） 合同授業①	・合同授業② 小川中，中条中，七二会中（3学年のみ）	・教材（インタビュー活動：英語）
9月 合同教科会（数・英）	・合同授業③ 信州新町中，信更中，大岡中（全学年）	・教材（チームスポーツ：保健体育）
10月 合同授業②	・合同授業④ 小川中，中条中（3学年のみ）	・教材（裁判員裁判：社会）
11月 統一問題（2学期末） 合同授業③ 合同教科会（数）	・定期テストの一部に統一問題を導入 ・全国学調の課題を基に作問	・テスト（一部共通テスト）
12月 合同授業④	・合同教科会（数学・英語）	・教科会
1月 合同教科会（数）	・統一問題，合同授業等の検討	
3月 合同教科会（数・英）		

資料-事例④



写真1：話すことを中心とした英語の授業（信州新町中、信更中、大岡中 合同授業）



写真2：合同授業では教科担任も複数で指導にあたる（右：山崎教諭）



写真3：裁判員裁判について学ぶ社会科の授業（2019/12/4 信濃毎日新聞）

連携の様子

山間・小規模校の連携による授業改善をテーマに2年間実践に取り組んでいる。昨年は、数学科の教員がエリアコーディネートを担当し、学力向上を重点においた近隣6校のネットワークづくりに取り組んだ。エリアコーディネーター教員は、6校合同教科会を定期的に開催し、全国学調やNRT等の調査の分析を行ったり、互いの授業を見合う機会を設けたりした。また、そこから見えてきた課題に基づき、定期テストを共同で作成するなど、6校の数学科が共通の視点をもって指導や授業改善にあたれるようにした。

今年は、昨年の実績を他教科にも広げるために、英語科の教員がエリアコーディネーター教員を担当し、英語の授業改善を中心に6校の連携を進めることになった。

エリアコーディネーター教員は4月に実施した全国学力・学習状況調査から、6校全ての英語の調査を早期採点し、「聞いて書く」「読んで書く」といった技能統合の問題や、「話すこと」に課題があると分析した。山間・小規模校の学校では、生徒が授業の中で多様な他者と英語を使ってコミュニケーションを取る場面が少ないと考えたエリアコーディネーター教員は、各校の英語科教員やALTを巻き込みながら対話が多い授業への転換の必要性を感じた。

活用効果（アセスメント）

連携の観点	・生徒の共通課題を基に、各校の授業改善を進めることができたか。 ・統一問題の導入により、生徒につける力に対して評価することができたか。
具体的変容	・合同授業の実現により、生徒が多様な見方や考え方に触れる機会がもてた。 ・統一問題によって各校の教科担任が共通の視点で授業改善を図ることができた。

連携の手応え（エビデンス）

英語の授業では、エリアコーディネーター教員が6校の全ての学年・学級の授業に関わり、対話を重視した授業を展開した。それにより、英語に対して苦手意識をもっていた生徒たちが、英語を積極的に使っていくことに自信をもつなど、英語を学ぶ意欲に変化が見られるようになった。体育の合同授業でも、大人数で学ぶことの楽しさを生徒たちが口々に語った。生徒たちが多様な他者と触れながら生き生きと学ぶ姿に6校の職員も刺激を受けながら、小規模校の連携による授業改善の可能性に手応えを感じている。